

1月2日

「イエスにとどまる」

ヨハネ 15:4

武安 宏樹 牧師

本書で強調されるのはキリストとの「いのちのつながり」、これをパウロは、キリストの内なる自分と、自分の内なるキリストという、超自然的な相互の交わりから、さらにキリストの肢体論を通して私たちの選びへ発展させます。15章1～10節には、英語' in'に相当する' en'という前置詞が14回も頻出して、「わたしにとどまりなさい」も正確には「わたしの『うちに』とどまりなさい」これは交わり以前に位置関係です。この箇所にも「とどまる」も10回登場します。主のもとに「とどまる」「つながる」(共同訳)「居る」(文語訳)ことを断ったのが最後の晩餐における背教者ユダで、対角線上の交わりに自ら出て行きました。キリストの贖い以降に信じた人々は、低空飛行であろうと救われていますが、主との食卓の交わりにとどまってつながり続けることが、何より喜ばれます。

「とどまる」「つながる」「居る」何れも消極的な響きができるかも知れませんがそうではない。実は「その実が残るように」(16節)の「残る」は同じ原語です。主イエスのうちにとどまることで、希望的観測ではなく当然の実が残ります。私たちを通して隣人の救いもたらされ、「信仰と希望と愛」(1コリ 13:13)がその年数に従って残されていきます。4節に「とどまる」が3回登場しますが、1つ目と3つ目は私たちが主語で「離れない」意から「とどまる」「つながる」が2つ目は主イエスが主語で「滞在する」意から「居る」が近いと思わされます。この在り方を絵画的に主イエスが語ったのが、放蕩息子のたとえ話でしょう。父はいつも家に居た。兄息子は長子だからか父の家業を手伝って助けていた。弟は家に自分の居場所は無いと、実だけ先に得てつながりを断ち家を出ます。

結果はご存知の通り。父から離れたことが元凶と気付いて頭を下げました。しかし父の態度は優しくった。関係を失って初めて父の有難さを知りました。けれども兄は逆で家に留まり父の下に居続けて、有難みがなくなってしまう、不肖の弟の帰還を歓迎する父に、つながり続けた意味が判らないと怒ります。そこで父は兄息子を宥め、弟がどうあろうと私とお前のつながりも分け前も、全く変わらない。それはお前がつながり続けて絶えず食卓に居たからだ、気づかないうちに最高の恵みを受けて、莫大な遺産を継承すると約束します。

1月9日

「仕える愛①」

ヨハネ 13:1

武安 宏樹 牧師

本書前半が12章で終わり、13章から後半部で十字架へのカウントダウンへ。これまではキーワード「いのち」「光」が頻出して、ユダヤ人多数に証しました。ここからは「愛」が高頻度で登場し、主が最も愛された弟子たちへ語られます。1節は次節以降と一線を画して後半部の要約となっています。「最後まで」は、「極みまで」(脚注/文語訳)の方が適訳ですが、どのような愛か見ていきます。

神の愛(=アガペー)は無条件&無私 of 愛と換言できますが、逆に人間的な愛には、「仏の顔も三度まで」「堪忍袋の緒が切れる」寛容の限界が表現します。世の人はみな罪人ですから、恣意的に生活すれば当然の如く衝突が起きます。昂じて殺人や盗みに発展すれば、社会的&法的制裁を受けることになるので、秩序が乱れないように国でも自治体でも学校でも、法体系が必要となります。されど法も権力者が濫用する恐れがあるため、下にある者がしっかり監視し、また運用する者の倫理観が問われます。そこへ世界宗教であるキリスト教が、十戒を始めとする律法を通して、世界中の法体系に影響しているのは重要で、戦争&疫病&格差に悩まされる世界で、「光は闇の中に輝いている」(1:5)と、私たちは世界を水平に見ますが、天の父は上からキリスト者を通して闇から灯される光を見ています。その光が束になれば、世界は変えられていきます。

バベルの塔で明らかなように、世界は民族も言語もバラバラにされました。だから国家間や人間関係で信頼関係が深まれば、全て理解できるかということ、そういうわけにはいかず、互いにルールを遵守し受け入れ合う努力をすれば、ある程度まで信頼関係を築くことは可能です。それ以上近づくと困難を覚え、必然的にそれなりの地点で賢く線を引くと、心を開けぬ寂しい世の中になる。全て相対的な世の中では、人間とルールだけでは心身共に豊かになれません。やはり私たちには絶対者が、絶対的な愛と正義による御方の救いが必要です。それこそが人間の愛と一線画した、極みまで愛することの出来る神の愛です。信仰と希望の基盤は神の愛、目的地はイエスの愛、動力源は聖霊の愛です。主イエスは極みまで、逃亡しようと裏切られようと弟子を信じ尽くしました。彼らが開く宣教の未来に希望を置きました。「彼ら」には私たちも含まれます。

1月16日

「仕える愛②」

ヨハネ 13:2-11

武安 宏樹 牧師

HBC小学最終夜6年生タイムで、若者用語「エモい」と好評の洗足ですが、これほど主の性格と愛を示す箇所はなく、十字架の型として「深い」ものです。構造は2～3節が分詞として4節の主動詞に従属しますが、ユダの裏切りを知っていたにもかかわらず、主イエスは食事中に奴隷の仕事たる洗足を始め、弟子たちの主でありながら、ご自分から低くなることで栄光を現されました。子が離れる、それも裏切って殺されるのを知りながら、喜んで仕えることが、見返りの望み無く命を捨てるのが親に出来るでしょうか。「脱ぐ」(4節)は、「捨てる」(10:11)と同じ語で、これから十字架で何をなさろうとしているか、デモンストレーションをしています。神の子たる冠を捨て、王服剥ぎ取られ、重罪人の刑罰という不名誉を受け、裸の王様として死んでいく者の弟子が、あなたがたなのだ。それは律法の知識を蓄えて周囲から優秀と認められて、弟子として所作を身に着けるなど積み上げではなく、「古い人を脱ぎ捨て」とあるように、プライドも能力も財産も捨てるのが主の弟子です(1^o 4:22, 24)。

されどペテロはそんな十字架道の深さや一方的な愛など、悟ることもなく、そんな奴隷がするような仕事は、代わりに私が洗って差し上げますと言って、主の奉仕を制止しようとし、します。良く言えば彼なりの礼儀とか人情でしたが、逆に言えば私でも出来るという、靈的視野の狭さから来る傲慢がありました。以上の言動は罪深いものでしたが、何でもよいから主のお役に立ちたいとの、一途な姿勢は評価できます。自分の感情や考えを隠せずぶつけて恥かくのを、厭わない点が彼の長所です。「後で分かるようになります」では腑に落ちずに、二言目「関係ないことになります」絶縁処分になったら大変だと反応します。だったら体全部と差し出すのは、主がきよめ主との理解は正しかったものの、洗足が救いの「手段」ではなく、救われた者が死に至るまで従順を示す「象徴」という理解には未だ至りませんでした。この感覚&理解&悔改めが彼の中で符合したのが、十字架と復活の後に身に沁みて自分の罪深さを悟った時です。この洗足は最後の晩餐の席上で行われました。救われた者が主の御体と血に与ることを、私たちは聖餐式の中において悔改めと聖霊の中で確認しますが、さらに主の謙卑の御姿を覚えて、愛の中で互いに仕え合って生きましょう。

1月23日

「模範を示す」

ヨハネ 13:12-20

武安 宏樹 牧師

「サーバント(しもべ型)リーダーシップ」という言葉が、ビジネス書などでよく聞かれます。企業もスポーツも社長や監督が右と言えば右を向くような、昔ながらのトップダウン型の支配的なリーダーシップも、今は通用しません。 去年のプロ野球両リーグ共に、2年連続最下位チームが優勝を遂げた背景に、メンバー各人の主体性を重要視し、働きやすい雰囲気とフラットな組織から、目的を意識しつつ相手を尊重し仕え合うことで、組織力が引き出されました。①傾聴②共感③癒しと配慮④気付き⑤説得⑥概念化⑦先見力⑧執事役⑨可能性⑩コミュニティ形成、以上10の要素を提唱者のR・グリーンリーフ氏は列挙します。ビジネスモデルゆえ注意は必要ですが、参考出来る部分も大いにあります

以上について本日の箇所と共に根拠となるのが、「仕える者に～しもべになりなさい」(マコ 10:42-44) 主の命令で、直前に異邦人の「横柄に～人々の上に」支配したがる権力欲が記され、天で主の右大臣&左大臣を所望する二弟子も、同様でした。主から評価を受けたがり、人の目に輝かしい奉仕をしたがり、それらを出世の足掛かりにすることで頭がいっぱいなのが、弟子たちでした。支配欲こそ荒野で主が試みられた誘惑であり、高慢こそ罪の最たるものです。そんな罪深い彼らだからこそ欲望を打ち破るべく、仕える模範に足を御手で触れて洗われる体験を施し、人の持ち合わせない謙遜の靈性を発揮しました。洗う者が跪き洗われる者が見下ろす。主を見上げるのとは逆の位置関係です。

この「しもべキリスト」の姿を、弟子なのだから模範にせよと主は語ります。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」(ヤコ4:7) この靈的原則の結果として「そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります」と、主の兄弟ヤコブは語ります。つまり他の弟子たちは受け入れたへりくだりを、ユダだけは拒んだのです。会計という役割に甘んじていた卑屈な思いからか、世界の偉人として名が遺るとの悪魔の罠に嵌り、ここから墮ちて行きました。神に愛され、主イエスの模範を見て、私たちは心からへりくだることが出来、偉くなくても踏みつけられても、主が丁度良い時に引き上げると期待します。前出の10要素は信仰無しに困難ですが、謙遜の力は信者に備えられています。

1月30日

「心が騒いだ」

ヨハネ 13:21-30

武安 宏樹 牧師

私たちはどのような時に心騒ぐでしょう。ユダのように人間関係で信頼が裏切られた時に、許せない思いや敵意から復讐したり動揺を発散させようとし、人間関係に限らず、災害や犯罪など想定外の事件にも心が騒ぎます。したがって人間が頼る何らかの基盤が揺らぐと、心も揺さぶられるものです。この原語は11～14章にかけて各章1回、14章は2回登場し、背景としては、十字架に向かう主イエスの心や弟子たちの、緊迫した精神状態があります。裏切ると知っていても、心から愛してきた弟子がいよいよ去り滅びに向かう。だから今回は最も収めがたい動揺ですが、主イエスは神の子でありながら、人と同じように動揺されて、結局は揺るがぬ信仰で全てを受け入れますが、弟子たちは未だ至らず疑いと不信仰に走る弱さがあるので、主は次章にて、世と違う平安と聖霊賦与を約束します。信仰があれば心騒がないかという、そうではありません。「心を騒がせてはなりません」(14:1)は現在時制なので、そのまま放置を戒めたままで、多感で繊細な人が不信仰では全くありません。心騒いで苦しみながら主を呼び求めるなら、主イエスは喜んでくださいます。

したがって主イエスも他の弟子たちも、立場は違えど心が騒いでいたのは、人としての自然な反応であり、感性の柔軟さは素直に神に対して向いていく、信仰の成長する土壌の役割であり、期待しつつ人の心に関わりたいものです。「主人が客人に皿から特別に御馳走の小片を取って与えることも、特別な友情のしるしであった。イエスは繰り返しその暗き心に呼びかけられたのに、ユダはその度に無感動のままに留まったのであった。」(バークレ)一言で言えば、愛の敗北です。不十分でも届かぬ訳でもなく、ただ受け付けなかったのです。「サタンはユダの心からあらゆる尊敬の念を奪い去っていたので、彼は岩よりもかたくなに、どんな警告も拒み、退けていた」(カウァン)主も他の弟子たちも、心が騒いでいてもユダだけは別でした。得体の知れない平安で固まっていた。だから止むを得ず送り出したのです。「すぐに」(30節)事務的で迷いの無い、冷たい挙動で、闇の世界へ旅立った彼が初めて心騒いだ時は遅きに遅かった。救いの汽車に乗る私たちも、御国では「あなたはわたしの愛を受けましたか」と訊かれます。頑なさを悔改め、再臨まで愛を伝えきろうではありませんか。

2月6日

「互いに愛し合いなさい」

ヨハネ 13:31-35

武安 宏樹 牧師

去るユダを主イエスは黙って見送ります。名を除くのは悲しいことですが、残る11名が結束する機会でもあります。この瞬間を「栄光を受けた」と表現し、死への導火線に火が点いた。ご存知の通りサッカーは11名で戦う競技ですが、「12番目の選手」としてチームを後押しするのが、声援を送るサポーターです。かくてイレブンの戦いが始まった。少ししたらわたしは居なくなるけれども、悲しんだり争ったり復讐したりせず、全員が取り組むべき宿題を与えると。それが「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように」（34節）これぞ「新しい戒め」と言います。十戒は1～4が神と人との「タテの関係」で、5～10が人と人との「ヨコの関係」、その精神について主は要約（マ 22:37-40）。だから「第11戒」は実際は新しくない、十戒の二大原則をミックスした戒めで、さらに十戒全てを守ろうとする敬虔さが、互いに愛し合う実と結ばれますし、反対に互いに愛し合わない交わりは、魅力が無いだけでなく律法違反であり、加えて自己充足的信仰では決して届かない高嶺の花、本当に難しい戒めです。主ならどう愛するか。嫌われ碎かれるのも覚悟で初めて互いに愛し合えます。

大事なのは34～35節の「愛」は、4回とも神の愛を表す「アガペ」が用いられ、主イエスが彼らを愛した愛を覚えつつ、弟子たちが互いに愛し合うことです。彼らに丸投げで愛し合いなさいではなく、主が12人目の選手として臨在して、居ないはずなのに居る。神の愛を以て愛し合うなら主も共に居られるのです。彼らは一癖も二癖もあり、心のどこかで俺が俺がとすぐ喧嘩腰になる人々で、主イエスが居ることで空中分解せずに、まとまりを保っていた集団でした。彼らの間の愛は未だ欠けただけで、互いの弱さを受け入れる寛大さに程遠く、神の愛が十分に浸透していませんでした。この命令はユダ離脱直後でしたが、一つは死に至る犠牲的な愛との意味と、もう一つは彼らが愛し合っていれば、語弊があるかも知れませんが、ユダが去る結果に至らなかったかも知れない。そのように残された者が気づいて、自分の愛の不足を悲しんで悔い改めつつ、互いに愛し合う共同体の力を、私たちも悔い改めと和解から体験すべきです。「キリストが自分の例を示しているのは、私たちがそこまで到達できるからではなく、少なくとも同じ目的を目指すようにするためなのである。」（カウァン）

2月13日

「いのちを差し出す」

ヨハネ 13:36-38

武安 宏樹 牧師

ユダと他の弟子との違いは、心の内に悪魔の思いを受け入れたかどうかで、表向き主の弟子を装いつつも、ユダの心は完全に主とは逆を向いていました。ユダとペテロに共通するのは、悪魔の惑わしを受けて一時離れたことですが、ペテロは死に至るまで従い通そうと、粗削りながらも主を向こうとしました。裏切るつもりは無くとも、試練に際して衝動的に師を否む弱さが原因でした。そんな後の挫折など想像だにせず、今更離れられるはずがないと詰め寄って、「今」について行けないのでは弟子失格、地獄の淵までお供したいと熱望します。主イエスは「今」＝「しばらくの間」を意味するも、直線的信仰者のペテロには、「今」＝「この瞬間」としか聴こえない。心の内には他の全員が辞退しようとも、自分だけは従い通して認められたい、カトリック的には聖人になりたいとの、功名心も無かったと言えば嘘になる。人は己の思いで主に仕えようとする、どうしても前しか見えません。それは彼の短所でも長所でもありましたが、彼の創造に臨席した主イエスは(詩 139:)、今の弱さも後の活躍も有言実行も、さらに殉教者の栄誉を受けることさえ織り込み済で、「今～」と言われました。

だから主の答の結論は「今～」ではなく、「しかし後には～」にあるのですが、後半部は彼の耳に全く入らなかった。主イエスは罪は罪と、不可は不可と、白黒つけた上で説得される方です。皆さんも挫折から如何に立ち直ったかを、思い起こしていただきたいですが、一つは自分の志す道を進む際にどんな、アドバイスを受けたか。もう一つは挫折の暗闇の際どのように受け止められ、希望を見ることが出来たか。あの時は未熟で聴く耳を持たなかったけれども、先生の仰る通りだった。彼は鶏の三度鳴くのを聴いて、我に返り泣きました。我に返るとは、自分が突っ走る前向きの信仰とは逆の視点から見つめ直す、砕かれないと得られない視点です。主イエスは「今」と「後」の間の崖っ淵から、成長していくのを期待します。ここで単に謙遜の必要という結論に終始せず、本章の流れから、「悪魔との戦い」「互いに愛し合う」動機を確認したいのです。まず隙あらば攻撃するのが悪魔&悪霊ゆえ、自分なりの献身が通用するほど易しくはない。さらに仲間内で愛し合おうとしない弟子に資格はないことで、宣教は教会形成による集団戦です。いのちを差し出す瞬間まで備えましょう。

2月20日

「心ひとつに」

詩編 36:11

武安 宏樹 牧師

「我らの生涯に起る香り高い賛美も、乱れた祈りも、恥ずかしい後悔の思いも、それら全てをキリストの御名に集中し、信仰というリボンで一つの花束に結んで、主の御前に供する」(矢内原忠雄)私たちの心をつにするのは努力でなく、そうならないことを悔い改め、祈り、それに神が答えることから始まります。砕かれた心で祈るためにどのような姿勢であるべきか学びます。

① 主の道を求めること (イザヤ 55 章 9 節)

ダビデの意識は「悩み苦しむ者」(1 節)としてへりくだり、天を仰ぎ見ます。神を見上げつつ自分の罪深さを直視しないのでは、信仰の実体が伴いません。だから黙想が必要ですが、私たちは日頃雑事に追われて祈りに集中できずに、されど怠惰を戒めて祈らねばと奮起しますが、枯渇して本当に祈れなくなる。私たちが救われたのは一方的な神のあわれみゆえ、祈りの霊は上から来ます。だから祈りつつアンテナを延ばし、主に照準を合わせて軌道修正していくと、聖霊は別の視点や深化を与えてくださり、全体像が見えて賛美へ導かれます。

② 御言葉からステップを踏むこと (Iヨハネ 2 章 7 節)

祈りの形として聖書から導かれる人、直観的な人、それら併用する人など、いろいろでしょうが、大事なのは聖書と教理の把握から自分の座標軸を知り、祈りの方向性について神の栄光を現すこと、隣人の建て上げに資するかなど、吟味することです。主の弟子として隣人愛を志すほど、自我は呻き声を上げ、自分の罪深さを痛感しますが、このステップを避けてはなりません(マ7:24)。私たちのため、主が十字架で愛と真実の契約を貫かれたからです(IIコリ 5:17)。

③ 心ひとつに (詩 86 篇 11 節)

キリスト信仰の基本にして盲点は、神は天に在し、私たちは地に住む罪人、御子キリストは双方の仲保者として、十字架で天地を橋渡しされたことです。私たちの霊は生来分裂して、主が統一してくださらないと調和がとれません。心の王座に自我が座れば混乱し、キリストが座れば生活に調和が生まれます。日々の信仰の決断を通して主は私たちのうちに愛の封印を押され(雅歌 8:6)、その保証が聖霊です。皆さんの祈りを聖霊が広げ導き統合くださるよう!

2月27日

「父の家」

ヨハネ 14:1-3

武安 宏樹 牧師

「わが父の家には住處(すみか)おほし」(文語)から、天の家について覚えましょう。「住む所(=英訳マンション)」は持ち家?賃貸?想像力がかき立てられます。ヘブル語「住む」の名詞形には「幕屋」の意もあり、主と会見の天幕でしょうか。ともなく信者に内住し、家賃滞納でもローン返済不能でも追われない家です。その住居は天に用意されつつ、死か再臨を待たないと入居不可なのではなく、喩えれば家は岡崎でも、父が経営する世の仕事に従事する間は東京の社宅と、二重の住居ということで、退職の暁には本宅で晴耕雨読の悠々自適の生活を、そのような希望が信者にあるのです。それも東京に居ても父は共に居られる。だから世でどんなことがあっても、あなたがたに住居があるから安心せよと、主は言われます。「やがて やがて 昇り行かんわれも わが家(や) わが家 わが家 わが住むを待てり」(新聖歌 470)「ここも神の御国なれば よこしま暫(しば)しは時を得(う)とも 主の御旨(みむね)のややに成りて 天地(あめつち)遂には一つと成らん」(讃 90)なのです。

されど人類の最小単位である家族に、夫婦&親子&きょうだい間に様々な痛みがあります。赤の他人なら不問でも、浮気や愛情の偏りや性格の違いで、いがみ合います。私たちは人間的に分裂状態を抱えつつ父の家に住むことで、励まされながら弟子として歩みます。分裂の根源はエデンの園まで遡ります。最初の人々が罪を犯したことで封鎖されますが、同じ地上で一線引かれたので、どちらも父が大家として管理しているのは変わらず、最後は境目を開放して、地上の部屋を閉めるために鍵を持っています。この鍵は預けた御子に対して、自分の人生を180度向き直り詫びるなら、誰にでも合鍵を与えてくれるので、主イエスの「われ天国の鍵を汝に与へん」(マ 16:19 文語)はそういうことです。必要なのは自分が悪魔を信じた者の子孫と認め、本当の父を信じる決断です。この合鍵を持つ者の共同体こそ地上の教会、愛宕山は50戸のマンションです。私たちの歩みは教会で礼拝を捧げ、合鍵で天の御国の前味を先取りしながら、からみつく罪や自分の弱さと戦って、幕屋を携えて着実に天に近づく旅です。「信仰に由(よ)りてアブラハムは、その往(ゆ)く所を知らずして出(い)で往けり」(ヘブ 11:8) 同章の旧約信仰者の全てが家族の痛みを経験しましたが、父の家に住む者は、「外なる人は壊(やぶ)るれども、内なる人は日々に新なり」(Ⅱコリ 4-5) 体験を得ます。

3月6日

「道を知る」

ヨハネ 14:4-6

武安 宏樹 牧師

ふみ出せばその一足が道となる 行けばわかるよ(清沢哲夫「無常断章」)。臆病を戒め勇気を振り絞り重い足を踏み出し、その道の善悪(よしあし)も自分次第とは、仏教僧侶の詩ゆえ無神論&汎神論ですが、私たちから見れば厳しい人生です。これに比べればキリストの弟子の歩みとは、師の一步後をついていけばよく、「わたしについて来なさい」(マコ1:17)それが即ち信仰者の道になる歩みです。ところが「あなたがたは来ることができません」(13:33)と言われたから大変。返す刀で「その道をあなたがたは知っています」理系のトマスは混乱します。「どうしたらその道を知ることが？」疑問を受け止めた主は金言を發します。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」単なる決め台詞(せりふ)には非ず、彼らの膠着した思考回路を、行き止まりの壁を道が立体交差で越えるように、平面から立体へと新しい青写真を描くための、起点(スタート)としての御言葉なのです。デボーションも暗唱聖句も通読も、機械的に毎日行うのでは無味乾燥ですが、聖霊の働きで実生活に適用し、他の箇所との関係や神学的枠組との検証など、御言葉が見えてきます。トマスはもっと道を見せてくださいと渴望しました。

「道」「真理」「いのち」三語の中では、文脈的には「道」談義となっていますが、原語「真理」「いのち」は本書で数十回頻出キーワードです。弟子たちにとって、「その道」とは真理に向かって伸びる、平面的で途方もない「旅」でありました。「道は御父に到達する手段であり、真理はこの道が正義の規範であることを明確にした。いのちは到達を可能にするための原動力を約束するものであった。キリスト教は哲学体系でも儀式でも法典でもなく神の生命力の分与」(M・テイ)キリストの背の上に道が、生き様の上に真理が、心の奥深くにいのちが在し、私たちは以上を既に受けています。さらに言えば本書で三語の登場の順番は、「いのち」(1:4)⇒「まこと」(1:9)⇒「道」(1:23)。これは人が到達困難なものの、言い換えれば信仰の優先順位ではないか。まず信じていのちを得ることから、真理も道も、パウロの口癖の如く「キリストのうち」(コロ2:3)に在ると分かる。聖霊の「いのち」もキリストの「真理」も内在するのだから、神の備える道筋を、私たちは洗礼者ヨハネのように作業員として、材料や工法なども心配せずに、いのちと真理を単純に信じて受ければ、それで十分と主は微笑まれるのです。

3月13日

「真実の愛」

マタイ 12:1-14, 20

渡邊 賢治 師

① 麦とパン(1~8節) イエスのあわれみ

1) さばく人たち：安息日に弟子たちが麦とパンを食べたこと

2) あわれみ深いイエス：弟子たちが「お腹を空かしてる」

◎大事なものは「愛」。「わたしはあわれみを好む」(7、ホセア 6:6)

「あわれみ」は、「変わらない愛」。人の愛は変わる(例：朝もやや露のごとく)しかし、神の愛は変わらない。

② 羊(9~14節) 片手を萎えた人のいやし

1) 非難した人たち—安息日にいやしを行うかどうか試す。

彼らの心は？ あわれみの心がない。

2) イエスのあわれみ：「穴に落ちた羊」をどうするか？

だれでも助ける。「人間は羊より大事ではないか」と言っていやしを行われた。イエスさまは悩み苦しむ人をほっておかれない。

③ 葦と燈心(18~20節) イエスは預言の成就。2つのことばにイエスさまの愛。

1) 葦：「傷んだ葦」—折って捨てる所を「折らない」神の目には私たちはみな「高価で尊い」存在(イザヤ 43:4) イエスさまは私たちを決して見捨てることはない。

2) 燈心：「くすぶる」もう消えかかっているが火はまだついている。「消さない」。イエスさまは「自分なんかだめだ」と思っている人を生き返らせてくださる。

3月20日

「神のかたち」

ヨハネ 14:7-11

武安 宏樹 牧師

「父を我らに示し給へ」(ピリポ)と「我を見し者は父を見しなり」(主イエス)両者間にギャップがあり、ピリポを不信仰の一語で片づけるのは簡単ですが、実務家の彼は(1:45-46/6:7)、具体的に事例を示されると生きるタイプゆえ、理屈だけでピンと来ない。彼なりの「神のかたち」は未だイエスとつながらず、同様に私たちも主と似ても似つかぬ、神のかたちを描いていないでしょうか。第二戒「何の形状(かたち)をも作るべからず」(出 20:4)の禁令は、逆に積極的に言えば、イエスだけ思い描くべしとの含みを覚えます。神は人の創造に際し(創 1:26)、後に罪が入ることで毀損するも、本来は肉体含め神の栄光の反映が目的です。罪深い肉体は忌むべしとの霊肉二元論の異端は、聖書の時代から今日に至り、真の救い以外にも、プラスアルファの知恵や体験を求める形で跋扈(ばつこ)しますが、私たちはあくまで聖書的に、創造主が御自身の似姿&像として人を造られて、救贖主が独り子を与えたほどに世&罪人を愛された、2点で抵抗すべきです。以上はピリポも私たちも頭で分かっているながら、実感に事欠いているもので、献身を志すと同時に、「これでいい！」単純な信仰に行きつくまで葛藤します。

この罪を犯さなければ&弱さを克服すればと、二元論的信仰を求めるなら、そのための知恵や体験も求めるでしょうが、聖書の神の愛と義は霊肉一元で、どんな恵まれない人にも神のかたちは存在し、神の息吹は身も心も霊も全て、回復を与えます。聖い道を求める者にも罪人にもそこに主は居られるのです。ピリポは彼らしく単純に受け取ればよいことを、わざわざ難しく考えていた。次に大事なことは創造主が「われわれ」と複数形から、三位一体への示唆です。彼のように神は目に見えない方との理解だけでは'1/3'しか分かっていない。'3/3'の全き理解のため重要かつ盲点は、聖霊の存在と働きを知ることです。聖霊は信者の内&外から働かれ存在的には聖化、働きの的には賜物&愛を行使、それだけでなく出産&家庭形成&狩猟&農業&漁業 etc. 社会形成を行わせ、私たちの肉体を通しての生き様と霊性から、世にイエスの存在を証します。むろん私たちは被造物に過ぎませんが、三位一体は私たちのためにあります。父&子&聖霊が手をつなぐ中に信者は居り、私たちが父を見てイエスを見て聖霊に在る自分を見ると、そこに「高価で尊い」(伊 43:4)似姿が現れます。

3月27日

「イエスの名によって」

ヨハネ 14:12-14

武安 宏樹 牧師

①「さらに大きなわざを」(12節)

一見して主イエスが行った以上に、多く救いに導き奇蹟を行うと読めます。そんなことを言うのは不謹慎とか、逆に額面通り受け取らないと不信仰とか、いずれにせよ覚えるべきは本章の流れで、主が父のもとに行こうとしており、抵抗する弟子たちに対して、どんなメリットがあるか丁寧に説明しています。主が天に居られる恵みと私たちが地上に居る恵みの、関係を知るのが大事で、彼らが抵抗したのは、師が居ないと何をしたら良いかわからないからです。もし主が不老長寿で地上に人として生きておられたら、どう接するでしょう。私たちは考えず&悩まず&祈らず&聖書読まず&人を気にかけず、主は過労。そのような人治主義の教会は意外と脆いものです。別れさえ試練と受け止め、牧師が替わろうが、コロナになろうが、戦争災害が起ころうが、全ては父の御手にあるのだから、何か私たちに為すべきことがあると主に求めた分だけ、主イエスの御業を代行できます。さらに在天の父は全世界を教区としており、力を合わせ祈りを合わせ励まし合う協力体から、リバイバルが発信されます。

②「求めることは、何でも」(13~14節)

接続語「また」とあるように①と②はリンクしています。主の御業をさらに大きく行うため、何でも憚ることなくイエスの名において祈り求めなさいと。「全ての祈りは、これをイエスの名において祈ることが出来るか問うことによって試される。考慮を経た祈り、御旨が成されますようにという祈りは常に答えられる」(パーカー)「彼は御父に対して、我々のための弁護人&仲保者で、御名により願うなら拒絶されない執り成し手に信頼するのである」(カヴァン)弟子たちは聖霊を受けた後、盛んかつ自由にイエスの御名で悔い改めを迫り、3000人が受洗、足なえの人に「立ち上がり、歩きなさい」(使3:6)と命じ癒した。イエスの名は力であり、血潮は悪しき力を打ち破ります。力を行使しながら、御心に適うか否か制御するのが聖霊です。祈るべきか迷うなら祈ったらよく、制せられたら悔い改めたらよいのです。14節は「わたし」三連発で、どんどん御名を用いて御自分以上の働きをしてほしいと、私たちに願っておられます。全信徒に特権が与えられ(マコ16:17-18)、求めた分だけ祈りがかなえられます。

4月3日

「助け主なる御霊」

ヨハネ 14:15-17

武安 宏樹 牧師

前回は主イエスの帰天でもたらされる、特権の内容2点をお話しましたが、本日はそれがどのようにして可能になるか、メカニズムについてお話します。本章で気付くのは主が離れて行く距離感に反比例して、聖霊が外から内へと入ろうとする密着感です。主イエスと御霊は三位一体で親しく交わりつつも、されど入れ替わり(16:7)の不思議な関係ですが、主の受洗時に御霊は降って、ピタリ密着しながら荒野へ十字架へ死へ復活へ天へ、導き手となりました。その後の五(ペン)旬(テコ)節(ステ)に信者にも降りましたが、主のように「上」でなく「中」へ降臨。人間は主イエスのような全き信仰で、つながり続けることが出来ないために、「うちにおられる」ようにしてくださった。内住の御霊&内住のイエスであり、私たちの側で手を振り解くのは不可能、密着しようと努力すらナンセンスで、信者の内奥に浄化装置が設置されて、聖霊の働きでイエスの似姿に化します。罪&肉との戦いは熾烈ですが、完璧なウィルスバスターが内臓されており、「聖霊は我々を真理に導く。イエスの言葉を思い出させ、自分から話すのではなく、聞いたことを話し、誤りを認めさせ、キリストをあかしする。」(M・エリクソ)

「助け主」の原語には、他に弁護者・代行者・慰め主・励まし手・勧め手の意も。「慰め主」(英KJV)訳もありますが罪や傷の修復だけでなく、主の栄光のため、悪魔の奴隷となっている魂を救出、悪霊追放、宣教のことばへの油注ぎなど、ポジティブに用いられます。聖霊は御自身を主張しないので私たちの側から、そのような経験がどれくらい&どのようにあったか、黙想し想起しましょう。聖霊派教会が重視する「体験」も素晴らしいですが、祈りと御言葉を手がかりに、こんなことにも光が当てられ、とりなしがあり、慰め&励ましがあったかと、私たちがどれほど地味な恵みを掘り出せるかで、信仰生活が豊かになります。内に住む方が生活の細部、それも罪を犯す時でさえ共に居てくださることで、暗闇に朝焼けの光が射す如く、心の底から泉が湧き真理を悟る経験をします。「わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が」(4:14)「神を礼拝する人は、御霊と真理によって礼拝しなければなりません」(4:24)御霊は自分をいやし、難しい人間関係を和解に導き、膠着した状況の打開に知恵を与え、物事の部分的理解に留まらず全体像の把握へと視野も拡げます。

4月10日

「内住のキリスト」

ヨハネ 14:18-21

武安 宏樹 牧師

「あなたがたのところに戻って来ます」(18節)がいつのことを指すのかは、①再臨②復活後 顕現③聖霊降臨、以上3つの解釈が古くからされましたが、再臨まで孤児のままはあり得ないので、②と③が有力説とされていますが、どちらかというより、まず復活後そして本格的には聖霊降臨時と段階的に、考えても良いと思います。主から逃げた弟子たちは、復活を目で見るまでは、自分が何者か何のため生きているか分からず、力の湧かない孤児の様でした。生ける屍と化した彼らは、直接的には主を捨てた罪を犯した結果なのですが、その経験でかえって、主が共におられることがどれほど恵みか分かりました。②と③の間は彼らのうちに、以前の動揺や反抗は見られません(ルカ 24:52-53)。聖霊の臨在は単に主が内に居られるだけでなく、死&復活&恵みの三循環(サイクル)を、私たちが追体験することで成長します。弟子たちは主の昇天以降に苦難から、見捨てられ感を持つ余地は無く、「居ないけれども、居る」確信がありました。以上は三位一体の神を信じないと体験不能です。地上では聖霊が内住されて、天ではキリストが再臨に向かって近づく。そう考えると①も一理あります。

21節は15節の実質的に繰り返して、聖霊の内住が自分の不安や力を受けるためではなく、神を愛しイエスを愛する目的のために個人的に住まわれます。「人間のおもな、最高の目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである」(ウェストミンスター大教理問答1)「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか?」「わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであること」(ハイデルベルグ信仰問答1) 両信仰問答の冒頭に人生の目的が明記されます。何と素晴らしいことでしょう。恐怖&不信&敵意&絶望が漂い、世界中で政治&経済&人権の劣化が深刻な、十戒後半の社会規定が公然と破られる悪い時代、神の愛に対する挑戦です。主イエスがこの世界に戦場に居るならどう思われるか。御霊が叫んでいます。4つの「愛」はいずれも神の愛を表し、無条件の愛&聖なる愛と換言できます。聖霊体験は愛体験、聖化は愛化です。2匹の魚と5つのパンしか無い私たち。それでも差し出せば5000人が満たされる。内住の御霊は働きたがっています。「空の空」(伝 1:)の時代、「立ちなさい。さあ、ここから」(31節)と主は語ります。

4月17日

「そこでお会いできます」

マルコ 16:1-8

武安 宏樹 牧師

弟子たちの故郷の地で復活の主と再会する意義から、学びたいと思います。主イエスは最後の晩餐の席上、「あなたがたより先にガリラヤへ」(14:28)と、予告しましたが、彼らは直前の「あなたがたはみな、つまずきます」で動揺し、頭に残らなかったでしょう。禁句である「つまずき」を公言する主は率直です。彼らは主に従い通すために死力を尽くさんとして、「頑張って」仕えつつも、不器用&不遜な信仰でありながら、主を愛し従うことに命がけだったのです。そんな彼らの弱さを受け入れ、たとえ失敗しても立ち上がることが出来ると、主イエスは温かい目で見守ります(ルカ 22:32)。つまずきを越える愛を知って、真の弟子となる。かくて彼らは故郷ガリラヤで主に再会することとなります。召された時と同じ漁師に戻り(1:17-18)、一晚不漁の悲哀を味わい(ヨハ 21:3)、主の出身&宣教開始ならびに彼らの故郷&献身の地の、ガリラヤが選ばれて、わざわざエルサレムから数日歩かせて、正式な再献身の場が備えられました。長らく留守にした家族のもとへ、それから生活を立て直そうかと考えていた。すでに主の顕現には与れど、不肖の弟子として心の整理は未だつかなかった。

だから敢えてガリラヤまで歩かせて、かつて主と共に歩いた懐かしい道を、辿りながら正式な任職式まで備えさせた。天の御国では関係ありませんが、地上では信仰者の成長のために、神が時間と空間を動かしリフレッシュさせ、最善のタイミングに持ち込むことがよくあります。私たちは何故ここに居て、何故このタイミングで導かれたのかと、気付かされることがよくあります。力無く網を下ろす彼らの姿は、客観的&主観的に敗北者以外の何者でもない。にもかかわらず神の目で見れば、つまずきを受け入れるに絶好の機会でした。当地で召された際も明確な挫折を味わってはならず、「してあげよう」(1:17)未来時制で、真の弟子に成るのは聖霊が降ってからと主は見定めていました。「ガリラヤを出発し、エルサレムにまで上り、十字架の上にまで上った主を見届けた上で、振り出しに戻る。それを可能にするのが復活の力なのです」(奥村修武師)

復活は再スタート(IIコリ 5:17)、移動時間と距離は御手によるカウンセリング、三回の質問前の備えであり、これにより三回愛していますと即答(ヨハ 21:15-)。私たちは過去に囚われ御手を見失うも、神は時空を用いられる粋な御方です。

4月24日

「四季折々の」

詩編 23:1-6

神尾 鋼行 師

①緑の牧場（1, 2 節）

1, 2 節では羊飼いの経験を通してダビデの信仰への思いが書かれています。神ご自身が羊飼いで自分が羊であり、それ故、乏しいことがないと言っています。神様は自分の全てをご存知です。だからこそ導き、乏しいことはありません。すなわち、緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに導かれるお方です。

②死の陰の谷（3, 4 節）

しかし、導きの中で、緑の牧場からそれてしまうこともあります。ダビデも罪を犯しました。悔い改めても罪を犯す弱いものです。その中でダビデは「主は私のたましいを生き返らせ 御名のゆえに私を義の道に導かれます。」その上で「死の陰の谷を歩むとしても私はわざわざを恐れません。」と告白しています。その理由として「あなたのむちとあなたの杖それが私の慰めです。」むちは過ちを犯した時に知らせてくれるもの、杖は正しい道に導く道具です。ダビデは神様に全き信頼をおいています。

③食事の交わり（5 節）

神様はサタンからの誘惑をよそに食卓を整え、頭に香油を注いで下さいます。私たちが整えるのではなく、神様ご自身が整えて下さいます。そのため心が癒され、喜びに満ちることが「私の杯はあふれています。」と表現されています。

④主の家に（6 節）

この食事の交わりに感謝するダビデはいつまでも神様に依り頼む決心をしています。「私はいつまでも主の家に住みます。」これこそがダビデの信仰の表れです。試練がある中、神様に心を向ける事が大切です。

この23篇で注目したいことばは「私」ということばです。ダビデと神様の関係について書かれています。短い6節の中で口語訳では14回、新改訳では15回、新共同訳では12回、2017新改訳では13回出てきます。「私たち」ではなく、「私」という個人を表すことばであることに注目したいと思います。

5月1日

「みことばを愛する人」

ヨハネ 14:22-24

武安 宏樹 牧師

「イスカリオテでないほうのユダ」は「ヤコブの子ユダ」「タダイ」と同定されあまり登場しない人ですが、主が救い主であると何故世に明示しないのか？斯く疑問を呈する彼らは、愛と信仰により開かれるみことばの関係について、未だ分かっていませんでしたが、私たちは彼らの無理解を笑えるでしょうか。

一つ目に、私たちが神との関係で覚えるべきことは罪が壁となることです。語源に的外れ&法的違反がありますが、全ての人間が罪を負って生まれます。もし人に原罪が無ければ、神との関係を深める双方の努力も不要となります。けれども被造者が創造主に対し、愛を無視してみことばに聞き従おうとせず、神無き道を選び取ったことで、世は自己実現の罪と惑わしに毒されてしまい、そこから悔い改めを志す人は僅かです。加えて罪のきよめには時間がかかり、聖書で啓示された神のみことばを、ブレずに受け止める適用が問われず。

二つ目に、神は私たちがみことばを聞いて受け止める困難を知るからこそ、外からではなく内から響くように、聖霊を信者の内に住まわせてくださった。「住みます」直訳は「住まいを造ります」。信者の内奥に秘密の隠れ家が存在し、夜な夜な祈りの家に通えば、罪の欲望は消えてみことばが聞こえます(雅 1:)。関係の深まり=みことばへの信頼です。弟子たちはまだ聞き方が未熟でした。サムエルの如き聴従の訓練が(I サム 3:)、大胆な活動を可能にします(同 15:)。真摯に聞かなかった王の悲惨な結末は、みことばの恐ろしさを公にしました。

三つ目に、じっくり聞いて存分に語り合う空間から交わりが深まることが、最初から全てを披瀝するよりも罪人には浸透することを、神はご存知であり、なおかつ罪&世&悪魔に対して戦う上で効果があると、確信していました。人の欠点は罪を犯したり不従順に加えて、一時に大きな恵みを見せられても、それを正しく理解する能力に乏しく、荒野の民のようにすぐ忘れることです。決して恵みを出し惜しみしませんが、関係の深まりという弟子訓練を通して、彼らは倒れた後に鮮やかな応答に導かれました。祈りとみことばへの専心が、隣人にインパクトを与え救いを与える。地道な関係が大きな波となるのです。

5月8日

「聖霊の働き」

ヨハネ 14:25-27

武安 宏樹 牧師

主イエスが在世中に弟子たちと「一緒にいる間に」説明して、教えることは、実地訓練ゆえ座学よりは効果的でも、人間ゆえ忘れて理解不足が生じます。主イエス曰く「教え」「思い起こす」とは、新しい真理を発見させるのではなく、旧約聖書の教えに、御言葉と聖霊により新しい光を当てることにありました。一例としてペテロが、「三度わたしを知らないと言います」預言を思い起こし、自責の念と激しい動揺から泣き出すおとで、聖霊が容赦なく彼を砕きました。またエマオ途上の弟子たちが空の墓を思案しつつ、背後から復活の主の声が、語られる中で断片的な知識が整理されていき、確信と証しの実を与えました。

「信仰は聞くことから」(マ 10:17)とあるように、私たちは御言葉を聞いて、聖霊の働きの中でどのように応えるかで、信仰成長のすべてが左右されます。聞くだけで詰め込むだけではいけません。聖書を読まず御言葉聞かずでは、聖霊が知識を用いることが出来ず、知識から始まらない信仰は危険でしょう。聖書をきちんと読んで黙想せず自分の知識で走れば、高慢と迷信に陥ります。間違った教えや罪の誘惑の激しい時代に、よく吟味して以上を避けるために、聖書を読み、説教を聴き、よく黙想し、分かち合い適用する流れが大事です。聖霊が全身を行き巡り蓄えた御言葉が循環し、悔い改めと感動が生まれます。「しかし思い出すことには、学ぶということも含まれている。人は前に知っていたものでなければ、思い出すことはできないからである。」(M・テニ)

主イエスが弟子たちに求めていたのは、目に見える主に盲従するのではなく、目には見えなくても御言葉をもって語り、その意味を一人一人に説き明かす、聖霊の働きによって、真のキリスト者として自立することです。主イエスの公生涯は3年ですが、聖霊降臨後～今日まで2000年に及ぶことを考えれば、主が弟子と過ごした期間は、信者が聖霊と自立するための助走期間であり、彼らはそれまで砕かれて見失いかけてもがく中で、恵みは増し加わりました。「世界が与える平和は逃避の平和であり、イエスが与える平和は問題を克服す平和である」(W・パーク)聖霊と共なる人生は何と素晴らしいことでしょうか。私たちは御言葉と生きる中で聖霊の実である平安を得て、世に証するのです。

5月15日

「さあ、ここから」

ヨハネ 14:28-31

武安 宏樹 牧師

マタイ&マルコ両福音書では、ゲツセマネで血の汗流し祈る主を尻目に、敵どもの接近も気付かず、眠りこけていた弟子たちを急かす場面でしたが、本書で「立ちなさい。さあ、行くのです」(31節)前後には、非常に中身のある主イエスの教えの数々が挿入されており、文脈に即して読んでいくなれば、父と御子、主イエスと弟子たち、聖霊の降臨など、霊的關係が鍵となります。本書のみ「さあ、ここから行くのです」この語は特定の場所でなく彼らの霊性、肉の思いや頑なさや甘えから、ぐずぐず留まろうとする反抗心を暗示します。

ペテロは「今」について行くこと、己の熱心があれば何処までも主に従えと、そこには不遜と共に、ついて行けなければどうなるのかと不安が共存します。漁師ならではの勝負師ぶりは、結果が出なければうなだれる繊細さもあって、その一喜一憂する性格は主と共にいることで、バランスを保てていましたが、主が離れたら立ち行かなくなると恐れしました。人は失敗を恐れるものですが、「神を信じ、また我を信ぜよ」(1節)深い所でつながる信仰を主は求めました。トマスは「どうしたら」と、主の道を知る方策を見失うことを恐れていました。目の前に主がいれば単について行けばよかったが、居なくなると迷子に陥る。そこへ「わたしが道」(6節)と、聖霊なる主に答が導かれる確信を求めました。碎かれるとは方法論や打算も含まれ、「わたしだけで不十分？」と問われます。

ピリポは「父を見せてください。」と、途上の信仰から実感を求めましたが、主は御名を信じて行い、祈り求めることで、目には見えずとも主の答えから、あたかもそこに主が臨在されるかのように、結果的に満足が与えられます。ユダは世の中全般にもっと主がご自分を現せば、支持が広まると考えました。我が国の教勢も頭打ち傾向です。苦境を打開せんと奇策を用いて混乱を招き、倒れる働き人もいます。しかし主は「人もし我を愛せば、わが言を守らん」と、それ以上でもそれ以下でもないと言います。以上の弟子たちの「ここ」とは、自分の不安や願いから主を手の届く範囲に留めようとする、歪んだ心であり、だからこそ座り込んで歩みを止めずに、自分の足で地上をしっかりと踏みしめ、希望が見えない時も祈りの手を挙げて「行く」なら、そこに道が出来るのです。

5月22日

「復讐の神」

詩篇 94:1-7

武安 宏樹 牧師

① 世の中の復讐

復讐といえば和製英語「リベンジ」を想起します。リベンジだとスポーツの勝負や自分の不甲斐なさに雪辱を期するなど、平和的な事柄にも使いますが、昨今のウクライナ情勢では、無差別攻撃に化学兵器や核兵器使用まで視野に、マスコミが敵視する為政者たちに天罰が下るようにと、世界は憎悪に満ちて、何でこんなことになってしまったのか、30数年前に東欧革命～ソ連崩壊など、冷戦期終焉と新しい世界秩序を夢見るも、以降もテロに中東問題など絶えず、世界全体に軍事的経済的に間断無く争いは続き、平和の基盤は脆いものです。一つ言えるのは争いは人間の業であり、為政者の小心や競争心やトラウマが、権力闘争や利害関係のせめぎ合いの中で、否応なく出てきてしまうものです。

② 内なる復讐

私たちは一人の祈りが神の手を動かし、世界を動かすことを知っています。一方で人や組織に対する敵意でなく不法を憎むゆえに、「復讐の神よ…」と、決然と祈ることの乏しいものです。自分で自分に復讐してはいないだろうか、そうありたいと願う自分が、なりきれない無力な自分を憎んではないか。キリスト者の自己評価は罪の弱さが残存も、神の子&キリストの弟子として、聖霊を宿し師同様の働きを期待されています。にもかかわらず苦い記憶から、内なる怒りを秘めた者は自分を傷つけて、返す刀で周囲に刃を向けています。けれども主はそのような者のために自ら傷つき死なれ、復活を成されました。苦しい過去を未来の光と結びつけるのは、創造主だからこそ出来る特権です。

③ 神の復讐（ローマ 12:19）

自分の内に十字架による赦しと和解があって、初めて他人と平和が来ます。自分で自分にリベンジでなく、他人を蹴落として認めさせるのでもなくて、嘲笑も迫害も受け止めつつ、自分が復讐せずとも神が報復してくださいます。有名なローマ 12:1 は献身を説き、その暁に復讐心を神に委ねられるのです。「復讐という悪は自分自身に対する度を過ぎた愛、生来の傲慢であり、自ら復讐を企てる者は、これを神から奪っている」(カウァン) 奉仕が他人への歓心や競争心に基づけば取り去られます。神を畏れ、争乱の世のため祈りましょう。

5月29日

「主はぶどうの木」

ヨハネ 15:1-3

武安 宏樹 牧師

ぶどうの木はパレスチナ地方で日本の桜のように、非常に身近な木であり、旧約の預言書では不思議なことに、イスラエルの墮落の喩えに登場します。血筋を誇るばかりで成長しておらず、伸び放題荒れ放題の偽りの木と違って、主イエスは「このわたしがまことのぶどうの木である」と、声を大にしました。もとは野生などでなく、父なる神とつながって血統書つきで生きてきた民が、自ら神に背を向けて切り離される道を選んだ末に、病気になり外敵に襲われ、野垂れ死ぬ「野良人間」と化し、篤志家が引き取ろうとしても牙を剥くほどに、身も心も荒廃していました。そこで主イエスは「牧者」(10:11)以上に近づき、外から父の御手が、内には御子が信者と結合する二重の恵みを語りました。「生きている枝は刈り込まなければならない。枝が伸びすぎて、養分が果実に行くより枝の方に行くことを防ぐためである。農夫が剪定鋏を巧みに使って手入れをするように、神は腐った枝を聖徒のうちから除き去り、しばしば残酷と思われるまでに、生きている枝をさえ刈り込まれるのである。しかも、最もひどく切られた枝が最も大きな果実を結ぶことが、しばしばである」(M・ティ)

主イエスのうちに私が、私のうちに主イエスが在する神秘的結合を通して、換言すると信仰によってキリストの枝となることで、「取り除き&刈り込む」神の御手を受けます。農夫の仕事は木と枝の特徴を熟知し、実を結ぶために、たとえ成長が遅かったり小粒であっても愛をもって、忙しく世話をします。農夫の愛を受ける側が痛みを覚えて、神の真実や愛を疑い離れる者もいます。野良人間なら試されないことが、キリスト者だからこそ刈り込まれ痛みます。「刈り込み」と「きよい」(3節)は同じ原語ゆえ、その目的は似姿への聖化です。聖霊のゆえに「すでにきよい(=義認)」者が、さらにきよくされていきます。農夫のケアを痛がって離れたくなる時、枝としての結合が威力を発揮します。御手を嫌っても主とのつながりは不変ですが、問題はどのような木になるか。単に実を結ぶだけでなく、刈り込みを受けて美しく見栄えする木になるよう、聖霊の実(人格)と賜物(働き)のバランスがとれた成長を、神は願っています。皆さんそのような御手を受けていますか。受けるだけでなく喜んでいますか。「捨てて～走る」(マテ 12:1) ことこそ、農夫の御手と聖霊の促しへの応答です。

6月5日

「あなたがたは枝」

ヨハネ 15:4-6

武安 宏樹 牧師

前回は木の視点、今日は枝の視点から、ぶどうの木を見ていきましょう。「あなたがたは枝です」本教会と役員会&総会&規則が一体化された「枝教会」を想像しますが、近年は主従関係というより有機的に運営されている教会も、多く見られますが、有形無形で拘束力&影響力を及ぼす教職者もおられます。それが強すぎると、主体的に考え祈り求める能力が育たず自立出来なくなる。もっともこのことは教会や信者に限らず、親子&夫婦&師弟関係等といった、良くも悪くも人間関係全般に言えます。枝とは付属品や複製品(コピー)でしょうか? DNAは無視できないものであり、コンプレックスとして否定するのではなく、むしろ感謝出来たら素晴らしいですが、そのためには「主にある自分」の確立が、どうしても必要です。「真理はあなたがたを自由に」(8:32)主は言われました。対するユダヤ人は我らアブラハムの子孫なりと、「自由」に過剰反応しました。真の自由を得ていない人ほど、優位に立とうと血筋や学歴にしがみつきます。いくら主の民律法の民と誇れども、行いが伴わないと周囲の反応は冷淡です。彼らは不信仰と甘えゆえ、悔い改めが影響を与えないと思いませんでした。

「あなたがたは枝」と信じたユダヤ人に言えば、主は袋叩きに遭います。弟子たちだから語り得た御言葉、枝という自己認識に有機的で恵みに溢れた、いのちの関係性を認め得る信仰が芽生えていたから、そのように語りました。御言葉を疑問も反論も無く全て受け入れているかといえば、そうではなくて、ぶつかりながら交わりが1往復も2往復も増し加わり、かえって深められる。彼らは切られて当然の大罪を犯すも、枝は折られることはありませんでした。悔い改める信者には誰でも実が結ばれる。十字架の罪と赦しの恵みは甚大で、この時に未だ居合わせなかったパウロも、聖霊体験から同じ恵みを得ました。彼はイエスとの邂逅の素晴しさゆえに、血筋も学歴も肩書も全て捨てました。彼が本気で「枝」に徹しようとしたことは、キリストの肢体(からだ)論にある通りです。枝相互の働きと特殊性までも、単に従属物や奴隷でなく愛と主の似姿へ昇華、されど真の解放を体験するがゆえ、逆説的にキリストに拘束されたいのです。放蕩息子は「枝」が不幸の元凶と家出。サタンは「枝」は愚の骨頂と惑わします。罪は人を縛ります。主につながり初めて神に栄光を帰し隣人を愛せるのです。

6月12日

「愛にとどまる」

ヨハネ 15:7-11

武安 宏樹 牧師

「わたしの愛にとどまりなさい。」(9節)を中心聖句として見ていきます。今日の世界を見渡すと、ウクライナの戦争や我が国の東日本大震災に際して、人々は深い喪失感とトラウマに苛まれてきました。傷ついた社会においては、いや戦争や災害といった特殊な状況以前に、表向きは平和な社会や家庭でも、生きる価値や居場所を見出せない人が増え、さらにコロナが追い討ちをかけ、潜在的に真の宗教が求められていますが、スピリチュアルに関心は高まれど、個人的に社会的にも宗教団体が、受け皿になりきれていない現状があります。人と人、人と社会、人と国家。複雑に絡み合った人間疎外に語り得るのは、神のことばを我々が取り次ぐことで、その重心が「わが愛に居れ」(文語)です。本章は「刈り込み」で分かるように、信者へと向けられたメッセージですが、キリストの愛にとどまる平安や力強さから、未信者に向けた証しとなるのと、「すべてのことを守るように教えなさい」(マタ 28:20)弟子化命令から言えば、自己愛や防衛本能からでなく、神の愛の中で生きることこそ弟子訓練です。

一つ目に「わたしの」すなわちキリストの愛、救いの愛にとどまることです。罪の泥沼から救い出す愛、創造の初めから救われることを選ばれた愛であり、選ばれた者が罪を犯しても漏れることなく、相応にきよめてくださる愛です。どれほど愛と能力を注いでおられるか、祈り聖書究めど捉えつくせぬ愛です。だから確固たる関係から愛に飢え渴き、自由自在に主を求めるのが弟子です。

二つ目に「愛の中に」在ることです。組織の中で立ち位置が与えられないと、試合に出られるよう周囲と競争してアピールする。社会は世知辛いものです。けれども主に救われた者の群れは全員が選手で、怪我や病気や罪を犯しても、戦力構想から外れません。かりに自分の価値が見出せず人に評価されずとも、神の愛の中に在ること臨在されることだけに、意義を見出すことが訓練です。

三つ目に「とどまる」「つながる」「住む」。じつとではなく、生活することです。主の切られることのない枝として、農夫なる父のケアで花を咲かすことです。天の住まいに入れられる前に、地上では仮住まいでも喜んで生きることです。「生も死も、不快も悲惨も、キリストの内に自らを誇ることを許された人たちには少しも妨げにならず、大胆に一切の悲しみを悔むことができる」(加ウァン)

6月19日

「互いに愛し合いなさい②」

ヨハネ 15:12-17

武安 宏樹 牧師

同じ題で2月に取り次いだこともあり(13:34)、②と追加した次第ですが、今回は主が下僕の姿をとられた洗足式～ユダの裏切りという緊張感の中で、弟子である証左として、「互いに愛し合いなさい」と命じた経緯がありました。今回は単なる繰り返しに非ず、掌返したように「我が友なり～僕(しもべ)といはず」、関係がタテ線の師弟⇒ヨコ並びの友人へ。ヨハネの巧みなストーリー展開と、①②間の流れも、弟子たちが順に「主よ、何處(いずこ)に」(13:36)と食ってかかりつつ、彼らなりの愛情表現&献身表明を主が受け止め、聖霊降臨を約束される中で、ぶどうの木なる有機的な共同体から、木&枝の同じ立場で教会を建て上げる、未来像を彼らに提示しながら、「死んで実を結ぶ友」として絆が深められます。この間の独白によって胸のつかえが下りたか、11節で主は喜びを隠しません。「人その友のために己(おのれ)の生命を棄(す)つる、之(これ)より大(おおい)なる愛はなし。」(13節文語)主はその愛を十字架上で実践していただきました。「主⇒信者/信者⇒主」と、一方通行で終わらずに、信仰によって互いに友情関係が深められていきます。互いに愛し合う中で聖霊が働かれ友が増し加わる。福音とは「友ネット」です。

「必要な時にそばにいる友達こそ、本当の友達」との有名な諺がありますが、なかなかそういう友に巡り合うのは難しいもので、胸の内を開いて話しても、分かってくれなかったり、笑われたり、正論返されたり、違和感を覚えます。誰もが神に造られた人ゆえ敬意を払うべきですが、100%価値観の合う人も、人間中にはいません。私たちの唯一無二の親友は主イエス以外に居ません。この方だけは私たちの弱さ罪深さを受け止め、死に至るまで付き合われます。人が人に関わることには限界があり、互いに愛し合うことも本来不可能です。けれども私たちの親友が主イエスならば、交わりの中心に臨在されることで、愛せない人を愛し理解できない人を受け入れ、いやされない人をいやそうと、とりなしてください。それが友なるイエス、キリストに在る教会の本質です。「二三人わが名によりて集(あつま)る所には、我もその中(うち)に在るなり」(マ 18:20)ゆえ、教会の中心に主は居られ、愛と救いの奇蹟を私たちを通して完成されます。「助言者(=相談相手)」(詩 119:24)主イエスを通せば、全ての人々が親友と化す。然るべき方法と塩梅で愛し合えるのは、未信者には得られない特権なのです。)

6月26日

「憎まれ迫害され」

ヨハネ 15:18-21

武安 宏樹 牧師

本章ここまで「ぶどうの木」「互いに愛し合う」「友」など、主と弟子たちとのタテ&ヨコの愛の関係について解説も、「選び」(16節)については未だでした。救い&献身に適用できますが、信じて愛にあふれたバラ色の人生かと言えば、なかなかそうはいかず、かえってうまくいかず信仰から離れる人々もいます。それでも私たちが今に至るまで、キリストと教会につながり続けているのは、努力や意志の強さ以前に、内なる主との関係に選びと愛を体験するからです。主の愛に包まれて初めて試練にも立ち向かえる。主イエスが先達だからです。選びの理由について、どういう実が結ばれているか、その中身が語られます。本書の執筆された紀元90年頃は、既にローマ帝国の迫害が始まっていました。「人々があなたがたを憎むとき、人の子のゆえに排除し、ののしり、あなたがたの名を悪しざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。」(ルカ6:22)とある通り、主の御名のゆえに不利益を受けるも、「その日には喜び躍れ」と励まされます。かくて文脈を捉えるなら、私たちは宣教の実だけでなく迫害の実を結びます。主イエスと弟子たちのように、憎まれ迫害されるフィルターを通らされます。

現憲法下で基本的人権も信教の自由も保障され、迫害は滅多にありません。家庭によっては苛酷な事例はあります。わが国の先達は秀吉の禁教令以降、江戸幕府に至って、政治的障害物と見做され迫害され多くの血が流れました。その恐怖感もあつてか、第二次大戦中の指導者は日本基督教団への一本化と、幹部の神社参拝、礼拝での君が代斉唱や宮城遥拝など率先して世に迎合させ、我が国の教会を迫害から守ろうとしました。来月の参院選の結果次第では、改憲を目指す国民投票と、その暁に全体主義&戦争協力の足音が聞こえます。私たちは迫害のために選ばれたとの視点から捉えれば、理解が変わります。平和な時代に言葉に行いに証しが振るわずとも、迫害の時代は生き様だけで、「一粒の麦、もし死なば、多くの果(み)を結ぶべし。」(12:24)を地で行けるのです。「当時、父は一介の不名誉な恥ずべき囚人として、不名誉に世を去った不幸な人生の失敗者に見えました。でも韓国教会史においては、正統な信仰を後世に橋渡しできたのです。半世紀を経た今日、百倍、千倍、1万倍の豊かな実を、韓国教会に収穫させてくれているのだと信じています」(朱光朝長老証言集)

7月3日

「御霊が証します」

ヨハネ 15:22-27

武安 宏樹 牧師

語るべきことを語らずに居れず、行うべきことを行わずに居れないのが、キリスト者です。旧約時代最後にして最高の預言者が、洗礼者(バプテスマの)ヨハネでした。彼は救い主の前座と意識しながら、ストイックな衣食住で激辛メッセージを、祭司階級のサドカイ派と律法の権威パリサイ派に対し、容赦なく語りました。未だ聖霊は受けずとも、誕生経緯から明らかなように彼に聖さがありました。だからヘロデが兄弟の妻を娶ることは律法違反と、黙っておれませんでした。ヨハネ曰く実を結ばぬ木は燃やされ(ルカ 3:9)、主はわたしにとどまるだけで、実を結ぶと語られる。ここに罪が浮き彫りにされて、救われる流れを見ます。ヘロデの妻の命令でヨハネ斬首も、罪を指摘する者を殺せば解放されるかと思えば大間違い。彼らは死んだはずのヨハネの影に生涯悩まされ続けます。私たちは証しを、キリスト&教会に導かれた経緯や日々の生活での恵みから、きれいに語ろうとしますが、「証人」(使 22:20)が殉教者の意味を含むように、本来悔い改めと命を懸ける覚悟が問われ、明確に語らざれば責任を問われます。ペテロはあなた方が主を殺したと明言(使 2:)。聖霊の火が彼を刷新しました。

一時代前は本田弘慈師や滝元明師など、集会で手を挙げないと大変な目に、遭うのではないかという伝道者が居られましたが、近年は二世の増加ゆえか、角の取れたメッセージが増えました。いずれにせよ聖霊の働きは真理を語る預言的要素があるので語ってナンボ。時に雄弁でなく訥弁な者から救われて、そのような想定外の結果を通して、悔い改め高慢砕かれ信仰が深められます。とにかく実践です。自分が語ることで頭がいっぱいになりがちですが、相手にどのような聖霊の働きがあるか、地域的戦いはないかなど(1コリ 1-2:)、とりなしも有効ですが、悪霊は優先順位を攪乱し私たちを過敏にさせるので、バランスも大事です。聖霊は決心だけでなく成長や教会形成まで多角的です。26 節に教えられることは、ヨハネのように聖く秀でた者が召されたのではなく、ペテロの如き失敗者、パウロの如き迫害者が、真理の御霊に打たれ悔い改め、使徒となった、一言で言えば聖霊の公共性です。私たちは手足となればよい。「その方がわたしについて証ししてください」ゆえに聖霊の促しに期待し「助け主」の慰めと励ましを得て繊細かつ大胆に、「あなたがたも証しします。」

7月10日

「私たちは主のもの」

詩篇 100:1-5

武安 宏樹 牧師

原文では各文頭が動詞「喜びの声をあげよ」「仕えよ」「来たれ」「知れ」「入れ」「感謝し」「ほめたたえよ」ゆえ英訳の方が近いですが、和訳は宛先「全地よ」の呼びかけで幕を開くのが美点です。全地＝全被造物。諸宗教信者や無神論者、富裕層や貧困層、平和な地や戦乱の地、右翼や左翼、現に罪を犯している人、自分に罪は無いと豪語する人など、古今東西&老若男女全て包摂しています。誰もが主に招かれているのであって、主を礼拝しなくてよい者はいません。「喜びの声をあげよ」その視線は、諸天や可視的事象の上に座す主に向かって、私たちは背後に控える全被造物代表として、全身で喜びの霊により叫びます。創造主を喜ぶことが人生の目的ですが、悪魔はこれを全力で歪めようとして、偶像礼拝や罪を提供します。ゆえに全地が招かれているとはいえキリストの贖いを通して罪を悔い改め、赦しときよめの確信を得た者が特権に与ります。この喜びの応答が礼拝です(マ 12:1)。礼拝しなければならぬとかではなく、受けた恵みを還元するために仕えます。「主に仕えよ」「御前に来たれ」並列で、主の臨在に霊的&物理的に、キリストの十字架への接近が求められています。

「十字架の陰に泉湧きて いかなる罪もきよめ尽す

居らせ給えこの身を主よ 十字架の陰にとこしえまで」(聖歌 396 番)

主イエスの十字架を見れば、私たちの体の献げ方と近づき方が分かります。何と独り善がりの礼拝、傍観者的な関わり方を、主に対してしてきたことか。「知れ。主こそ神。」礼拝と知識どちらが先ではなく、喜びをもって礼拝して、近づくことで、体験的に「主が私たちが造られた」事実を関係性から知ります。3節が本篇の中心。主を知ることが、私たちが自分の人生の支配権を開放し、過去の罪や将来への不安から解放されていく過程で、礼拝と知識は一体です。加えて「主の民」「牧場の羊」集団性が明記され、私たちは国家でも会社でも、夫のでもない所属を告白します。それは以上に仕えないという意味でなく、むしろ未信者以上に喜んで仕えますが、その上に主の所有が優先するのです。4節「入れ」は「来たれ」と同語ですが、「主の門」「大庭」と具体的な空間にて、感謝&賛美で躍りつつ、さらに深く「奥の間」(雅 1:4)へ誘い、最後の5節は、前節までの理由に主の慈愛と永遠を挙げ、「真実」は「アーメン」と同語根です。

7月17日

「去って行くことは益」

ヨハネ 16:1-7

武安 宏樹 牧師

「つまずき」について考えます。原語は罫のバネが期せずして外れてしまう、この箇所では意外なことに驚くとか、不意打ちを喰らう意外性の意味を表し、他に罪に陥らせたりショックを与えたり、期待を裏切られる妨げに用います。前章からの流れで聖霊降臨の予告と並行しており、信仰生活に即して言えば、聖霊の働きを正しく知ること、私たちは決定的なつまずきから守られます。主イエスは弟子たちとの関係の成熟度を見て、少しずつ苦難予告をしました。よって不意打ちではありませんが、彼らは目に見える主に依存していたので、居なくなるだけでつまずきであり、それだけ主との関係は深まっていました。諸教会で牧師につまずいたとか、あの信徒が新来者をつまずかせているなど、互いに偏見や独自の神学や過去の傷を盾にして、足を引っ張り合っています。そのような葛藤に牧師も信徒も適切に関わるのは、なかなか難しいものです。弟子たちの狭さは、自分たちの世界に主を留めようとするのが原因でした。しかし主は天に凱旋することで、一層パワーアップして恵みを還元するため、敢えて彼らのもとを離れて行くことを受け止める、天的な信仰を求めました。

言うまでもなく弟子たちは主が去って行くことは、死活問題と恐れており、主は御霊の賦与と恵みについて丁寧に説き明かすも、未だ悲しんでいました。そこで「あなたがたの益」と、わたしが居続けるよりもお値打ちと損得勘定で、庶民の目線に下りながら御自身の名にかけて、だから大丈夫と語り掛けます。聖霊の働きを受け入れるか否かで、信仰が成長するかつまずくか決まります。前章のぶどうの木で、教会的成長と個人的成長の密接な関係が語られますが、不和の絶えない教会は、人間的な好みや過去のしがらみに囚われ依存します。弟子たちは主に依存していましたが、それでは成長しないことを知っており、自立した信仰を持つために、主⇒御霊へ「牧師交替」をチャレンジしたのです。聖霊は古い皮袋を脱ぎ捨てて、新しい皮袋に変えるように私たちを促します。それは私たちの決断にかかっています。皆さんは御霊と自立していますか？一つ目の恵みとして御霊は人格的な実「愛・喜び・平安」(ガウ 5:22-26)を結び、二つ目に御霊はキリストの肢体として、各人ごと違った賜物を分け与えます。目的地は互いに愛し合う群れの建て上げです。御霊に依存し自立しましょう。

7月24日

「御霊の効用①」

ヨハネ 16:8-11

武安 宏樹 牧師

「世の誤りを明らかに」(8節)とは、「ある人が自らの過ちを理解し承認するまで詰問する」(W・パーカー)意で、「助け主＝弁護士」(7節)の性質とも相まって、世の中ではあり得ませんが、検事&弁護士&裁判官&矯正教育の一人四役を、単に責めるだけでなく悟らせて確信させて、向き合わせて聖化まで導きます。

一つ目に「罪について」。「罪」は無冠詞単数のため、個別の罪の集積でなく、性質を表します。私たちは殺人や盗みや偽証などが典型的な罪と想起しつつ、今日は犯しても明日は犯さないようにと励み、頻度が減れば成長と感じます。けれどもそう考えているうちは、キリストの贖いを真に知らないといえます。十戒では全ての罪を網羅していませんが、世の法に触れる殺人&盗み&偽証、性犯罪以外は罰せられない姦淫、万人共通の貪欲さえ、並列で罪とされます。「すべての人が罪の下にあるからです」(マ 3:18)全的墮落と言われるように、自分ではどうしようもないことを受け入れ、ただ信じるかどうか問われます。

二つ目に「義について」。罪を明るみに出すには標準が無ければなりません。世の正義は相対的です。主が死罪に処せられたのも総督が難色を示したのに、群集心理に支配された人々による同調圧力と、背後の悪魔の惑わし故でした。「あなたがたが殺したのです」(使 2:23)ペンテコステでペテロは責めました。けれども神は全ての支配を貫通して御子を上げ、聖霊が信者に注がれました。「これを聞いて心を刺され」(使 2:37)ることで、「死は勝利に?み込まれた」と、聖霊は罪による死を通して復活の追体験を与えて、天から新たな力が来ます。

三つ目に「さばきについて」。キリストの復活は罪と死の力を無きものとし、以上を司る悪魔の力を打ち破りました。「不信者に誤りを認めさせることは人の力の及ばないところである。ただ聖霊の力のみ深く罪を自覚させ、悔い改めに至らせる」(M・テニ)「キリストはさばきを混沌として支離滅裂な物事に対立させている。悪魔が神の子に独裁権を奪われた後は、この世は復興され、きわめて節度ある秩序の輝くのが見られる」(カウァン)個人的な悔い改めから、世直しまで聖霊のさばきの中に、地の塩として送り込まれるのが私たちです。

7月31日

「御霊の効用②」

ヨハネ 16:12-15

武安 宏樹 牧師

創造&統治&審判の神、人の形で来られて十字架で贖いの業を完成されたキリスト。一方で目に見えないし何をしているか判りにくいのが聖霊ですが、帰天したイエスの代わりに、信者各人の内に宿り最も近く臨在される方です。それは信者が罪赦されたとはいえ相変わらず罪深い心を、きよめてくださり、並行してキリスト同等の働きを代行させる故で、創造当初の人への回復です。人の墮落によって失われた最たるものは、神と人への愛と信頼の関係であり、その空洞を埋めるために他の神を造り、人間関係で愛と報いを貪り求めます。親子関係の傷は夫婦関係に歪みをもたらし、産まれる子の発育に影響します。罪とは神に背を向けるばかりに、人生を不満と貪りに向ける悪循環となって、この世ばかりでなく「あの世」でも浮かばれずに、永遠の滅びが待っています。今月は元首相が銃弾に斃(たお)れたことで、政&財&宗教の暗い結びつきが暴かれ、他方で加害者の生育環境に、愛と成功に乏しく暗い不満の人生と推測します。因果の打破を信心に求め、新興宗教は可視的な功德や献金で対価を与えます。これこそ真の神に出会えずに、奴隷的に生きる人々の姿ではないでしょうか。

聖書は聖霊だけでなく、敵対する悪魔の下にある悪霊の存在をも語ります。主イエスは罪に苦しむ者に対価を求めませんでした。愛は金で買うものでも、除霊で得るものでもありません。罪意識から隷属させるのが悪霊の働きです。反対に無償の愛で内奥から、五感と肉体に至り健康に解放するのが聖霊です。どの宗教も教典や予言者の言葉を持っており、キリスト教も聖書を権威とし、取り次がれてきましたが、神の言葉より聖職者が崇められてはなりません。聖書 66 巻にて完結した啓示に、自由の御霊が働いて人は生かされるからです。主イエスは残りの生涯で語りきれないと考え、時間&空間&能力の制約から、「聖霊を通してキリスト者は全て権威ある個人教授を」(M・テ・イ)委ねました。創世記～黙示録で啓示は完結しましたが、それを聖霊が各人に展開していき、私たちの内面の罪の悔い改めと癒し、歪んだ親子&夫婦&隣人関係の和解に、祈りと御言葉を通して教えてください。聖霊は目的を持っておられます。それは世が己の栄光を高めるのと反対に、主イエスの栄光を伝えることです。不義の世を主イエスは愛されて、同じ霊で罪人を愛するのが聖霊の効用です。

8月7日

「苦しんで学ぶ幸い」

詩 119:71

武安 宏樹 牧師

① 苦しみについて

「私は苦しむ者、貧しい者です」(40:17)「神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと」(イザ 53:4)などと多く登場、貧しさ&卑しさ&低さに通ずる語です。私たちは「何故?」「どこから?」「いつ?」など5W1Hを知りたがりますが、そんな一筋縄ではいきません。罪を犯した、為すべきことを為さなかった、周囲は心無い因果応報で片づけたがりますが、その見方が正しくないことは、三友人が神に怒られたことで明らかです(ヨブ 42:7)。苦しみを苦しみとして、そのまま受け止めることが私たちに求められています。早く抜け出そうと、策を講じるのが全てでないことを、信仰をもって受け取り待ち望むことです。苦難の僕も理解できない事柄の答は、キリストを待たねばなりませんでした。

② 神のおきてを学ぶ

苦しんだ結果として自分なりに悟りを見出し、諦めの境地に至るのでなく、そこに神のおきて、聖書の御言葉と聖霊の働かれる原則を見出すことです。苦しみのベクトルを自分や他人のせいではなく、神の法則性に向けることです。「学びました」と確信を持って言うためには、謙遜に苦しみを受け止めること、余計な理由を付加しないことです。「すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みには時がある」(伝 3:1)神のおきては摂理の御手です。皆さんは苦しみの経験の数々を通して、何を学び取ることが出来ましたか?

③ 幸いと言えること

この語は悪霊の発作に悩まされるサウルが、ダビデの演奏で「良く」なった、また別の箇所では「上機嫌」「陽気」とも訳されます。だから苦しみ抜いた末に、苦虫かみつぶした顔で「幸せということでしょう」「良しとしましょう」などと強弁する様ではなく、苦しんで学んでこんな良いことはないとの意味です。自分の罪や落ち度ゆえでも隠したり否定的にならず、何を学ばされたかで、同じ苦しみに遭う人への知恵が増します。自分の愚かさに苦しんだペテロが、信仰によって喜び躍ります(1ペテ1:7-9)。意味不明な苦しみもありますが、神の愛と摂理の中で学んだ「幸せ者」と言えるのが、信仰成長の証しなのです。

8月14日

「悲しみは喜びに」

ヨハネ 16:16-24

武安 宏樹 牧師

① 「しばらくの悲しみ」

主イエスが死んで葬られて、弟子たちが主を見ることの出来ない短い期間、それから復活して再び会見するまでの期間の二つを、「しばらく」は差します。旧約時代は神殿と律法を奪われる捕囚期、帰還後も周辺国支配に翻弄される、中間時代など暫しの試練がありましたが、「慰めよ、慰めよ、わたしの民を」と、キリストが地上に来られたのは、対決ではなくまさにユダヤ人のためでした。時至りて主イエスと出会った弟子たちは、ここに真の救いが、これが全てと、良くも悪くも自分の手に握りしめていました。その信仰に焼きを入れるため、「しばらく」の悲しみが必要でした。この期間は後の栄光の意味を考えるなら、空白期間ではなく、かえって無くてはならない重要な時間となっていきます。「見る」(16節)は違う二語ですが、前者が眺める意、後者がはっきり見る意で、加えて前者が現在形能動態から、弟子たちが自分の力で現に主を見ており、後者が未来形中態から、間もなく肉眼と共に霊性を通し主を見させられます。

③ 「永遠の喜び」

21節の分挽の苦楽から、22節は四段構成で悲しみから喜びへの昇華を語り、「奪い去る者はありません」は現在形で、復活の主と会見して初めて得られる喜びではなく、「今は悲しんで」いる時から既に喜びの種子の存在を示します。この喜びの受け方について、23~24節でしかるべき求め方を主は教えながら、大胆に父なる神に近づけと命じます。24節には動詞の時制が4つ登場します。「満ちあふれるようになる」は過去の行為から現在へ時間の幅を有す完了形。主イエスを信じた瞬間から内なる泉は湧き、目に見えずとも臨在を表します。「聖霊が約束されているのは、怠惰に寝て待っているようにするためでなく、むしろ彼らが心から注意深く提示されている恵みを望み、求めるように仕向けるためである」(カウァン) 私たちは仲介者(ディーラー)を通じ生活の必需品を買うように、主イエスは父と聖霊をつなぎ無償で、「わたしの名によって、求めなさい」と。求めればそれだけ受け、求めなければあなたもわたしも残念と言われます。山上の説教を想起しますが(マ7:7)、聖霊に満たされて高い倫理基準さえも、行えるようになる。「主の祈り」こそ聖霊の祈り、最も大胆な求める祈りです。

8月21日

「勇気を出しなさい」

ヨハネ 16:25-33

武安 宏樹 牧師

14章以降で主から弟子たちへの決別の教えで、愛にとどまり続けるように、ぶどうの木や聖霊論を通して、各人の理解に応じて丁寧におさらいをします。「今、分かりました」と語る弟子たちは、果して本当に腑に落ちたのでしょうか。主の目には後のつまずきも織り込み済でしたから、この長い教えの目的は、彼らがつまづかないようにすることではなく、聖霊を受けて自立した暁に、教えがつまずきも含めて生かされていくことを、主は願っておられました。だから限られた時間で焦っておらず、彼らへの教えに手応えと期待も込めて、愛の視点を持っています。私たちも教育に関する温かい視点に学ばされます。彼らは全て悟ったのでも悟っていないのでもなく、まだ悟る途上に居ました。悪く言えば、大して分かっている訳でもないのに、分かった気になっている。そのような信仰の途上で一喜一憂している人を、受け止める器が問われます。何て馬鹿なことと一蹴すれば、彼らの感動は止まり悟りを否定されたと感じ、自分の理解がどれ位なのか、主との関係の座標軸が見えず成長に至りません。肯定的に受け止め、理解への道筋を愛をもって示すことが求められています。

「今、信じているのですか」の答を単体では呆れているように聴こえますが、32節以降でそうではないと分かります。本当に今になって信じたのですか？そうではなく、ずっとついて来たから信じていることに変わりないでしょう。主は彼らの信仰を認めつつ、有頂天になって自分の弱さを忘れていることに、そんな楽勝モードで乗り切れるほど甘くないと、視野を広げ謙遜を求めます。32節前半で彼らをガツンと砕いた後、主が言いたかったことは後半部でした。「わたしは一人ではありません」人間的に独りぼっちで惨めな最期としても、一人ではない確信こそが真の信仰と、体験的に心の深い部分での臨在信仰を、掘り下げることを求め、その体験は聖霊体験のみならず敗北体験も含みます。弟子失格の烙印を押され、キリスト者廃業を覚悟する、最も苦しい試練にて、何につながっているか問われながら、これから神の愛が分かるというのです。「わたしにあって(in Christ)」キリストの内に私が居ることに平安を得よと。私たちが苦難を通らないバイパスが選択肢にあれば、迷わず選ぼうとします。「しかし、勇気を出しなさい」迫害をものともせず臨在を仰ぎ勇気が湧きます。

8月28日

「福音のために生きる」

Iコリント15:1-5

佐藤 賢祐 師

①はじめに

Iコリント15章にはイエス・キリストの福音についてのメッセージが綴られています。コリント教会内にキリストの復活を否定する異教の教えが浸透していました。その切実な問題に対して、パウロは15章冒頭で綴ったのです。「あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。」

②福音宣教の土台

一人でも多くの人に神のことばが伝えられていくように、キリストの福音が伝えられていくように、その思いがパウロの言動の根底にありました「私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。」 Iコリント9章23節

③私たちは何を信じているのか→信仰告白・教憲

日本同盟基督教団は、信仰の教理を、教会の憲法として、8つの項目に分けて掲げています。聖書→神→三位一体→人間（罪）→キリスト→聖霊→教会→終末

④福音とは

福音とは、イエスさまの十字架の死と埋葬、そして復活です。Iコリント15章3-5節※引用聖句、イザヤ書53章4-5節・詩篇16篇10~11節

⑤福音宣教の情熱とその土台

イエスさまの福音を一人でも多くの人に伝えたい！パウロには福音宣教の情熱となる御言葉の土台がありました。ローマ人への手紙8章38節

⑥おわりに

私たちも、今週、新しい週から始まる一日一日、この地上で、限られているこの一時一時を、わたしの人生に深く介入し、私の罪を贖い、永遠のいのちを与えて下さった救い主イエスさまと共に歩んでまいりましょう。そして、私たちを通して、一人でも多くの人に、イエスさまの十字架と復活、この福音のメッセージが伝えられていくように、共に祈り合いつつ、歩んでまいりましょう。

9月4日

「父の栄光を現すために」

ヨハネ 17:1-5

武安 宏樹 牧師

本章は「大祭司の祈り」と呼ばれ、四福音書の主イエスの祈りでは最長です。前章までは弟子たちとQ & Aにより、今後への不安を和らげる座学でしたが、得た知識を実践できるかが大事です。いきなり次章の凄惨な現場へ向かわず、園への途中どこかで祈ります。面と向かってでなくても祈りの背中を見せて、祈りから現場が始まることを教えられます。この祈りは①ご自分のために、②弟子たちのために、③後に信者となる人々のために、三部で構成されます。「これらは3つの同心円のようなもので、全てが共通の中心点を持っており、祈り全体が永遠のいのちという一つの中心概念でまとめられている」(M・テニ) 本日は①ご自分のための祈りから学びます。目を天に向けるのはユダヤ人の祈りの姿勢として一般的ですが、背後に弟子たちと今後の信者たちが控える、その代表として御前に出ます。私たちは個別の祈禱課題から祈りがちですが、まず誰よりも親しい関係であるべき天の父の前に進み出て、座標軸を確認し、それから一対一の関係において願いを捧げる。この①⇒②⇒③の優先順位と、私たちと同じ人間としての弱さと限界を認め、御前に進む謙虚さを見せます。

両手を伸ばす先に父を慕い求め、両足は人類と共に大地を踏みしめながら、キリストの御体が天地の橋渡しとなり、初めて栄光が地上にもたらされます。雑事を後にして主だけ見上げると雑念が消えます。祈りは人の思いを越えて、課題が深められたり、視野が広げられたり、逆に祈りが止められたりします。「知る」は単なる知識に非ず、男女関係のようにみずみずしい交わりの意です。キリストとの一体感がないと祈りがブレます。まず思いを潜めて静まること。でもそれだけだと会話にならないので、信頼関係の中で思う所を語ります。主イエスが二度願ったことが「わたしの栄光を現してください」(5節)です。私たちのように図図しくも身の程をわきまえず、栄光を求めるのではなく、父が何を自分にしてほしいか聞いて行うことで、結果的に栄光が現されます。私たちは自分の段取りで完成したがりませんが、その策が御心に適っているか、祈りの手を挙げることです。主が介入されることも人が与えられることも、聖霊は直接私たちではなく、神の栄光のために想定外のことをしてくださる。だから「私を通して栄光を現してください」恐れ多くも祈ることができます。

9月11日

「すべてあなたのもの」

ヨハネ 17:6-12

武安 宏樹 牧師

大祭司の祈りの第二段落「弟子たちへの祈り」で、「わたし」「あなた」「彼ら」トライアングルが幾度も登場する、この祈りは何と信頼に満ちていることか。一つ目に、父なる神が救いに導かれる者を予定していることです(Ⅰ^h 1:4-5)。予定説については昔から議論ありますが、伝道が無意味と考えるべきでなく、救いに定められている人が必ずいると確信して、探しに行けばよいのです。この方法で主イエスも弟子を導き、彼らも父からの預りものだというのです。教会も牧師も信徒も「すべてはあなたのもの」と信じて、地上の生涯を送ると、自分が自分がと主張する誘惑を退けることが出来ます。だから救われた者も、これから救われる人も神のものと、聖い期待から伝道と教育に励みましょう。

二つ目に父から委ねられた弟子たちの信仰への信頼が見て取れます(8節)。鶏が三度鳴くまでに主を知らないと言った裏切りに、ペテロはつまずきます。けれども主は予定通りで、罪を憎みながら民を憐れむ信頼に驚かされます。こんなだらしのない信仰生活で良いのだろうか。でもキリストを受け入れたら、主は私たちを離れることなく、愛と恵みを続けることと信頼を止めません。信仰生活は私が主を信じる以前に、主が私を信頼してくださっていることを受け入れることです。自分が受け入れられていないと思うと歪な言動に走り、信頼以前に自分で何とかしようとするので、不信が自分と他人を苦しめます。自分を頼みとする頑なな霊性があれば悔い改め、周囲にいれば戒めましょう。

三つ目に「御名によって、守り、保」たれるように、神が配慮くださいます。主イエスは父から受けた栄光によって、私たちの信仰が喜んで主の御言葉につながるための力を注いでくださり、引き離そうとする力から保護されます。残念にもイスカリオテユダだけは11人と逆方向の、隔ての壁を乗り越えて、滅びの汽車に駆け込んで、気づいても遅くいたたまれない最期を迎えました。救いへの選り、主からの信頼、御手の守りの以上三点を受け入れようとせず、自己憐憫に陥って、会計奉仕を自分で自分を維持する慰めにしていたのです。彼の如く自分で自分を守ろうとしてはなりません。打ちのめされ砕かれても、神の守りに任せること、愛と信頼の御手に委ねることから信仰は始まります。

9月18日

「世から聖別されて」

ヨハネ 17:13-19

武安 宏樹 牧師

「聖」の原意は分離&区別のことで、神の御性質は罪&汚れ皆無の「聖」です。聖霊体験できよめに与り、罪や痛みから御言葉で悔い改めによる心の一新を、味わう方もいるでしょう。このような体験は入信時もそれ以降も続きます。漁師シモンは御言葉に従うと大漁を経験し、「私から離れてください」(ルカ5:8)罪深さを痛感しましたが、この分離体験から主イエスの聖さを痛感しました。にもかかわらず主に従いたいという、全く異なる思いが不思議と沸きました。砕かれた後に神の選びによる献身の招き「わたしについて来なさい」(マ1:17)が彼の心に刺さり、全てを捨てて主に従いつつ聖を求める生涯が始まります。弟子たちは聖別されるも、未だ完全に聖なる者となっていないのは明らかで、自分を大きく見せたり仲間内で競争したり、山上で神々しい幻を目にすれば、私が祠を3つ作りますなどと、神の聖も自分の卑小も弁えぬ底の浅い信仰が、露呈します。彼らは主と共に居られれば何でもできると確信していましたが、「真理によって彼らを聖別してください」(7節)祈る主は御自身を差し出して、「どうしてお見捨てに」(マ27:46)分離され焼き尽くされる模範となりました。

「世のものではありません」(16節)されど「世に遣わしました」(18節)とは、相反するのではなく密接な関係にあります。私たちは罪深い世に生きています。わが国の信者人口は1%にも満たず、今世紀以降の教勢は停滞しています。信徒と教会の価値が問われますが、戦中の偶像礼拝&戦争協力の罪に拘らず、戦後の教会の歩みは全て正しくはないでしょうが、主に守られてはきました。平和な時代の中で教会形成と神学の安定から、次世代に襻をつなぐことです。「キリスト教は私たちに困難が回避されるような人生ではなく、克服されるような人生を与えているのである」(パーカー)だから私たちが聖くされることは、自分のためではなく世の難題に取り組むためにあります。暗い時の流れの中、キリスト者は叫び求めながら、宣教の明日への新しい扉が開かれようとする、今は忍耐の時間です。十字架に耐えられなかった弟子は世から逃げることで、自分を保つあまり神からも逃げていた。主の御側で喜んで仕えていた時代も、自室で引きこもっていた生き地獄の空間も、世の時間空間を越えたところの、永遠の価値観から出て行くところに、「わたしの喜び」(13節)が在るのです。

9月25日

「一つになるために」

ヨハネ 17:20-26

武安 宏樹 牧師

「この箇所は私たちにとって特に貴重である。というのはイエスが私たちのために祈っているからである」(パーカー)その祈りは「すべての人を一つに」で、それは不信者や信者であっても敬虔でない者ではなく、父&御子の関係から、御子&弟子たちの関係に及び、その神秘的結合から栄光を反映する目的です。そこで「一つになる」とは何なのか。異を唱えれば制裁を受ける軍隊式統制は、遠目に隙の無い一致した集団に見えます。独裁国家による粛清も存在します。政治権力が戦争に際し国民を統制するために、古くは共産主義国や近年では原理主義などを仮想敵とし、武器をさばいて利権を漁り兵士の血を流します。戦時中はわが国もプロテスタント全教派が合同しましたが、霊的一致に非ず、主の御名が天皇の名の下に置かれ、教会が偶像礼拝の器官に成り果てました。そこまでキナ臭い一致でなくても、スポーツでも誰かの威信がかかっており、敗れて迷惑かける恐れから一つになったりします。美しい一致とは何なのか。聖書では人間的な叡知と利害の結集による一致が、バベルの塔の建設でした。自分たちの利益&栄光が動機で、神は言葉を散らし断念させました(創11:。)

罪人の企図する一致には、権力も金も集まるところに悪魔も盛んに働いて、あらゆる悪事が絡み、墮罪で誰一人義しいことを意図しない絶望の世界です。にもかかわらず主イエスは彼らが御自分を信じることで、御名の栄光のため、未だかつて人類が考えも行いもしなかった方法で、一致を切に願っています。利権や名誉や天罰の恐れからではなく、自由で主体的な聖霊による欲求です。違いを排除でなく創造主の御業と認め、理解できなくても受け入れ合おうと、知的努力と愛&赦しを求める信仰と、謙虚に人の限界を認め寛容を求めます。バベルの塔で四散した国と言語は、聖霊の降臨で信者に体験的な一致を与え、さらに世界各地に教会を生みます。よって私たちの集う教会は一致の学校で、パウロはこれをキリストの肢体に喩えて、各人が違えど一つの目的のために多様な働きをする賜物の豊かさを、Iコリント12章やエペソ4章で語ります。なんと美しい共同体でしょうか。罪に毒されて心身の分裂を体験した罪人は、キリストにつながることで初めて愛し合い、互いに尊び合う奥義を知ります。信仰は個人的だけでなく共同体的成長を通して、ダイナミズムを味わいます。

10月2日

「イエスの逮捕」

ヨハネ 18:1-11

武安 宏樹 牧師

告別説教を終えた主イエスは弟子たちを連れて、ゲツセマネの園に向かい、当地はイスカリオテユダも熟知しており、兵士の軍勢を率いて対峙しました。満月に不似合いな灯火類と重装備の物々しさ、政治秩序を揺るがす内乱罪か、社会の平穩を乱す騒擾罪か。そんな蛮行どころか為したのは慈善行為なのに、逮捕とはお門違いですが、「だれを捜しているのか」と進み出る主は泰然自若。水戸黄門の印籠すら持たず、「わたしがそれだ」たった一言で一同転倒します。主の御名が臨在自体が武器です。彼ら同様イエス憎しで血眼のサウロもまた、「近づくこともできない光」(1テモ6:16)に倒れ、「エゴー・エイミ」と聴きます。彼ら軍勢もサウロも同じ闇の中に生きていたのに、正反対の人生となります。まことに主イエスは悪魔の手先と化したユダと軍勢に、御名のみで立ちます。弟子にお伴も求めず去らせて、敵の行動も熟知しながらも主と戦地へ赴いた。私たちはどうでしょうか。主が共に居られる臨在信仰だけで立っていますか。御名の恐るべき力を信じないばかりに、第三戒違反の罪を犯していませんか。信頼すると言動が変わります。主が共におられるゆえに孤独を愛しましょう。

対角線に立つユダに対し、ペテロは主の側で敵に立ち向かおうとしました。彼は良かれと思って文字通り助太刀をしましたが、主の道を妨げていました。剣を抜く合理的理由もあります。苦しみの杯を避ける誘惑と必死に戦う主を、睡魔に襲われつつ見聞きしていたからで、「御意(みこころ)のままに」は聞き落としたか。弟子たちも霊的な限界だけでなく体力気力も、精一杯を尽くしていたことを、主イエスも喜んでいたでしょうが、されど使命を果さねば評価は0なのです。神は人間に対しては大甘ですが、主イエスは御子ゆえに徹頭徹尾従うのです。祈りつつ逃避の誘惑を退け、父の御心と一致し「どうして飲まずに」なのです。本日前半は一人でも力強く立つことを、後半は人の優しさも懇願も振り捨て、御心に向かって力強く歩き出す、何者も止めることにできない矢印を見ます。「立ちなさい」で終わるのでなく、「さあ、ここから行くのです」(14:31)が続き、苦しみの杯を飲むために十字架を背負い、丘を上る一步を踏み出すのです。罪人の救いを決意し父の御心に従う愛に、不動の信仰と魂の収穫への希望が。刑場への茨の道も天の祝宴に続きます。主と力強く立って踏み出しましょう。

10月9日

「暖まるペテロ①」

ヨハネ 18:12-18

武安 宏樹 牧師

主イエス逮捕に際して、今回は「わたしがそれだ」の一言で敵軍が転倒する、恐るべき御名の力を学びましたが、力の誇示でなく質問に答えたまででした。これに鼓舞されたペテロは、自分の力で抗戦せんと剣を抜くも主は諫めます。今回は力を奪われた両者が、何に信託して立つか違いが浮き彫りにされます。アンナスは現大祭司の舅に過ぎませんが、宗教界の首領として権力を手中に、そこへ宮清めで主が既得権益を四散させたために、敵意は相当なものでした。ペテロとしては「わたしがそれだ」で兵士だけでなく、世の権力者に至るまで、誰でも倒されたらと願ったでしょうが、主の逮捕は敵の軍門に下ったと見え、主ご自身は決してご自分を否みませんが、力を見れないペテロは落胆します。私たちも目に見えて力が共にあると、臨在を感じて聖霊の恵みを喜びますが、それ以上に大事なことは、御言葉からの黙想&適用から力をいただくことで、残念ながらペテロは目に見える状況から、気分が上下する程度の霊性でした。主が語られた十字架と復活の御言葉を堅く信じれば、結果は変わった筈です。可視的事柄や感覚の背後にある霊的な見極めを、御言葉で峻別することです。

「戦いの場から遠くにある時、私たちは有り余る勇気を持っている。しかし実際の体験に、私たちがどんなにこけおどしであったか、どんなに私たちの空元気が空しいものだったか、暴き出してしまう」(加ゲァン) 敵を向こうに回して勇敢に立ち回るも、主が姿を消すと敵に囲まれ何も出来ず孤独を思い知った、ペテロは主が共に居ないと何も出来ない人間で、主を喜ばせるため一生懸命、言葉も行いも努めてきた彼は、鶏が鳴く前に主が去った時点で抜け殻でした。「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。」(12:26) 彼はどこまで来られたのか。同じ中庭でも官憲の所有ゆえ向こうの世界です。勇敢さは鳴りを潜め、目線は下、心は上の空。先ほどのオーバーヒートから、瞬時に全身クールダウンして、夜の冷気が染みる脱力経験はありませんか。他でも無い罪を犯した時、具体的な業だけでなく心が主から離れた瞬間です。ペテロは最も主に近づきながら、世と調子合せて暖を取る敗北者の姿ですが、私たちが彼らと違うことは、御言葉に従って罪の赦しの恵みから(Ⅰヨハ1:9)、力の無い日々の中でも、聖霊による悔い改めと回復の愛の炎が燃えるのです。

10月16日

「暖まるペテロ②」

ヨハネ 18:9-27

武安 宏樹 牧師

主イエスの取り調べとペテロの否認が交互に、両者の対照が明示されます。16章までの教え⇒17章のとりなし⇒18章の実戦、の流れで読み解いてみると、「わたしにとどまりなさい」(15:4)の命に従えなかったのが、否認を犯した。もしも彼がとどまっていたら、初の殉教者の榮譽に与ったかも知れませんが、言えることは使徒書がある以上、ペテロの否認は通過点に過ぎないことです。「失敗は最高の師」とあるように、人はそこから如何に成長するか問われます。よって弟子訓練は16章の教えで終わらず、本章の実戦がクライマックスです。「大祭司の祈り」は①御自分のため②弟子たちのため③後進のため、の3つが、同心円状で共通の中心点と学びましたが、主は①を最優先でブレることなく、その結果が敵の前に「わたしがそれだ」宣言と、「公然と話す」原動力でした。この父との関係の密接度、聖霊中心のしたたか&しなやかな対応を通して、主は弟子たちに背中から学んでほしかった。「御前でわたしの栄光を」(17:5)敢えて祈られたのは、彼らが父との関係無しに何も出来ないことを学ぶため。私たちは事前に祈るか以上に、無力さと共に主と一つとなる願いが大事です。

次に弟子たちへの信頼に基づき「彼らが一つになるため」(17:11)祈ります。主の逮捕を見て恐れたペテロは、同じ所に居ながらも心は離れていました。大祭司とのやりとりを、「立って暖まっていた」(18, 25 節)が挟み込むように、打たれる師を背に突っ立って暖を取る意気地無しと、隙間風が強調されます。三度の否認は偽ったのではなく、彼のありのままの弱さが口をついて出ました。本書が後代に記されたにも拘らず、この記事が削除どころか詳述されるのは、失敗を通して私たち後進に知ってほしい、重要なメッセージであるからです。一方で弟子たちには、神とすでに契約関係にあったと主張します(17:6-19)。要するに一つであったのに一つに徹しきれず、にもかかわらず一つなのだと。主に贖われて過去&現在&未来全ての罪赦され、神の子とされることを義認、これは身分に関することで信じた瞬間に完成しますが、中身が完全に一つと変えられていくのは聖霊のきよめが必要で、生涯かけて召天時に完成します。否認を促す三者は主が代弁しているように聞こえます。間違いなく主の弟子、創造前から園で一緒と。努力以前に聖霊は四方から「完全に一つ」を助けます。

10月23日

「キリストが与えてくださる新しい人生」

マタイ 9:14-17

中村 孝 師

1. 断食についての質問を受けるキリスト (v. 14)

ヨハネの弟子たちが断食をしていない弟子たちに疑問を抱きました。旧約時代にはモーセ、サムエル、ダビデといった偉大な預言者は断食を行いました。また新約時代にはイエス様も40日40夜、荒野で断食を行いました。しかし、断食は信仰における義務ではありません。

2. キリストの回答 (v. 15-17)

この質問に対してイエス様はたとえ話をういて回答されました。

2-1. 結婚式のたとえ話 (v. 15)

・ここでイエス様はご自分は花婿であると言っています。花婿と一緒にいるときは喜びに満ちています。

・花婿が取り去られる日が来る、すなわちイエス様が十字架上で死なれることを示しています。この日には悲しみのあまり断食をします。しかし十字架の後には復活があります。この悲しみは喜びに変わります。これはまさしく新しい人生の幕開けです。

2-2. キリストが与えてくださる新しい人生 (v. 16-17)

イエス様が地上に来られたということは新しい時代の幕開けとなりました。

2-2-1. 新しい布と古い布のたとえ話

新しい布は水に濡れると縮んでしまいます。しかし、古い布は何度も洗われて縮んでいきます。真新しい布切れで古い衣に継ぎを充てると、古い衣は破れてしまいます。

2-2-2. ぶどう酒と皮袋のたとえ話

ぶどう酒も同じで、新しいぶどう酒は発酵するので、古い皮袋に入れると破れてしまいます。

旧約時代の古い教え、律法から新しい契約

イエス・キリストを信じるだけで私たちは救われます。多くの恵みすなわち

- ・ 罪の赦し
- ・ 新しく造られ、神の子とされる
- ・ 聖霊が内住される

といった恵みを受けることができます。私たちの肉体は滅びますが、イエス様を信じることで、永遠のいのちが与えられます。信仰義認という新しい時代を切り開いて下さったイエス様は、信仰生活で弱い状況にある中で私たちが神様に祈る時に助けて下さいます。

10月30日

「何を告発するのか」

ヨハネ 18:28-32

武安 宏樹 牧師

本書は三福音書がユダヤ宗教者たちとのやりとりに重きを置くのに対し、総督ピラトとの官邸～裁判に至る応酬と人間観察に、重きが置かれています。「おまえたちが、さばくがよい」(31節)彼はこんな裁判に関わりたくなかった。物質的に仕事を増やしたくないだけでなく、心理的に不気味さを感じており、会見した外庭と邸内を4度も行き来する動きに、平安の無さが明らかです。ガリラヤ人迫害の報いか(ルカ 13:1)、妻の見た悪夢が崇りの前兆か(マタ 27:19)、未信者の彼さえ危険を感じ、「この人に罪無し」一点張りは恐怖の証左です。悪意の満ちた検事が訴え、やる気の無い判事が門前払いする間に主は立たれ、政界と宗教界の両巨頭に挟まれながら、弁護士もつかずにひとり居られます。されど臆することなく証しする主イエスに、目に見えぬ弁護士が介在します。聖霊は助け主&援助者&とりなし手(14:26-27)。不当な裁判で不利な立場に置かれたとしても、聖霊が慰め&励まし、真実を証しされるので平安です。この場面で主だけ平安、ピラトもユダヤ人も弟子たちも不安なのは皮肉です。誰を恐るべきか、主は弟子たちに御自身の姿を見てほしいと願っていました。

ユダヤ人たちは律法の一語一句に追われ、ピラトは権力剥奪の不安に怯え、弟子たちは不義理に打ち砕かれ、三者とも何かに訴えられ不自由な生き様で、意識するしない以前に、彼らは一言で言えば自分の罪に苛まれているのです。「如何なる訴訟(うつつえ)をなすか」(29節文語)どう見ても何の落度も見つからぬのみか聖さに照らされて裁く者自身の黒さが浮き彫りに。表向き聖さを装いながら、中身は残忍なユダヤ人がよほど罪深いと感じつつ、自分も彼らと大差無いと、誰に何の権威があって「ユダヤ人の王」を裁けるのかと、ピラトは恐れます。主イエスを囲む以上三者の、自己中心&律法主義&無責任&不従順の罪が、キリストを死に追いやった。期せずしてピラトは全人類の罪を暴いています。私たちがそのような罪に縛られていないでしょうか。自分の汚れを棚に上げ、表面的聖さで人を裁いたり、自分の立場を守るため正義から逃げて偽るのは、神以外のものを恐れるからです。信仰成長とは世&罪&悪魔からの自由です。主イエスは単独で立ち向かった結果、聖霊は罪深い私たちの弁護士となられ、責めの中でも主の十字架を見上げ、赦し&いやしを受けるように促されます。

11月6日

「真理とは何」

ヨハネ 18:33-38a

武安 宏樹 牧師

ピラトは総督として、中間時代の辛苦を耐え忍び歪んだプライドを持ったユダヤ人をどのように治めるか手腕が求められましたが、高圧的な政策ゆえ、評判は良くありませんでした。そこへ彼らがイエスを死刑に処さないならば、皇帝に訴えるとばかり脅迫します。世の政治は権力を巡るパワーゲームです。強硬策の背景には中間管理職の立場や、業績での出世争いもあるでしょうが、結局は保身が第一で、国や民のことを配慮したり責任感などを考えようとせず、他方では自分たちで決めなさいと丸投げにする、優柔不断も併せ持ちました。ユダヤ人のことも対極にあるようで、即物的で自分と大差無いと見下げつつ、「あなたはユダヤ人の王なのか」(33節)「真理とは何なのか」(38節)発言から、軽蔑心や違和感が透けて見えます。薄汚い貴方が本当にユダヤ人の王なのか。かりにも王ならば、国内がこんなにゴチャゴチャ乱れて恥ずかしくないのか。自分まで振り回されていい迷惑だと。「私はユダヤ人なのか」「あなたは何をしたのか」(35節)には、内輪もめに自分もローマも巻き込むなど怒りを表し、意味不明な36節の返答には一体何が言いたいのかと、いら立ちが隠せません。

世の法体系は罪を犯したか否かで成立し、証言に基づいて決める性質です。「何をしたのか」に答えず、「それでは、王なのか」どう思うのかと詰め寄る。かたや世の支配者、かたや神の国の御子。両者の会話はかみ合っていません。主イエスはまっすぐに神の国は世に属するものではないと、証ししています。「王」と認めるも、これをもって死刑に値しないとピラトは判断しましたが、「真理について証しするために…」出自に、自分とは違う世界の人なのだ、一線を引きました。「真理とは何なのか」は単なるからかいや軽蔑に留まらず、「貴方はいいよな。羨ましい生き方だ。俺みたいな俗物には真似できない。もしこの世に真理や真実があるならば、板挟みの俺を自由にしてくれよ。」これが本音でした。救いの手は伸ばされるも、屈折した心はそれを拒みます。職務に忠実に釈放に努める一方、心の闇を明け渡し悔い改めようとはせずに、「ポンテオ・ピラトの下(もと)に苦しみを受け」結果的に後世に不名誉な存在として、名が遺されます。真理を尋ねども帰依を拒む彼こそ、不信仰の本質なのです。真理は地上でなく天からです。まっすぐ生き、まっすぐ伝えましょう(14:6)。

11月13日

「無罪認定」

ヨハネ 18:38b-19:7

c 武安 宏樹 牧師

「真理とは何なのか」ピラトの問は、門外のユダヤ人を前に雲散霧消します。「私はあの人に何の罪も認めない」非公式ながら判決に自分を強調するのも、反対勢力を取り締まらないのも、頑固な反面気が小さく世と妥協する性格を示しておます。本日はピラトを反面教師に私たちと主との関わりを考えます。

一つ目に「何の罪も認めない」のに、「過越の祭りでは、だれか一人を…」と、ピラトがユダヤ人との関係悪化を恐れて、互いを利する妥協案を出しました。彼なりの計算ですが、無罪を有罪に仕立てて恩赦とは論理が矛盾しています。主イエスは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」(14:6)と言われ聞いた弟子たちは途中つまずきながら、主と向き合うことで以上を得ました。キリストとの出会いで、私たちは自分を守ったり偽ったりすることを止めて、世の評価も罪への裁きも悪魔の惑わしも、恐れるに値しないことを学びます。真理とは主イエスの人格です。神は人がまっすぐ礼拝すべく造られています。

二つ目に恩赦案が不調となると、再び無罪を宣言しつつ主を見世物に弄び、暴行を加えることで、死刑に至らずともユダヤ人の鎮静化を期待しました。無罪の者に対し、世の歓心を買うために精神的肉体的に痛めつけるところに、自分より弱く抵抗しない者を傷つけ満足を得る、暗いじめの原理を見ます。「彼は蔑まれ人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた」(イザ 53:3) 苦難のしもべが目に浮かびますが、これこそ「真理とは何なのか」二つ目の答。無罪も放免を良しとせず、人が生まれつき負う暗部を自ら受け苦しむ姿を見、私こそ人を傷つけ神を傷つけた罪人の頭と悔い改め、深い癒しがなされます。

三つ目に鞭打ちでも満足できないと、三度無罪宣告も死刑ならご自由にと、無責任を宣言し無秩序を認める最悪の表明をします。状況を悪化させたのは、彼の優柔不断が原因です。けれども主イエスは無抵抗で十字架にかかります。それはご自分のいのちをこんな罪人らの贖いに、捧げるのが御心だからです。主が生死の責任を取れるのは、死の鎖につながれず父子愛が強固だからです。「良い牧者は羊たちのためにいのちを捨てます」(10:11) 私たちも同じように、関わりを委ねられている人のため、神から与えられた責任を全うしましょう。

11月20日

「誰の友か」

ヨハネ 19:8-16

武安 宏樹 牧師

ピラト&ユダヤ人たちの言葉の数々は、主を恐れない者の馴れの果てです。頑なで権威的な一方で世論に怯え、自分に固執する一方で自分が無いことを、カムフラージュするため、黙す主イエスに世の全権は我にと強弁する(10節)。されど主イエスは答えず民は狂乱し、ピラトは板挟みで無力を痛感します。ユダヤ人たちは律法を盾に訴えるも(7節)、「カイザルの他われらに王なし」恥も外聞もなく「主こそローマ皇帝!」と信仰告白する鮮やかな変節ぶりです。皇帝の友に非ずとの殺し文句にピラトは震え上がり、これで衆議一決します。「カエサルの友」を錦の御旗にする彼らは、その名を利用しているに過ぎず、心の王座に自分のエゴが座り、殺人者&偶像礼拝者たる正体が温存されます。そのように自覚する者は世にほとんど居ないでしょうが、誰の友かと言えば、彼らはサタンの友なのです。何の力が彼らを自己中心に駆り立てるのは、創世記3章では惑わしの言葉が、一時の感情や状況に訴えて忠誠を迫ります。ピラトも一時おいて反論すべきところ、外圧と内なる不安に見事に屈します。その好例が定時前に犠牲を献げたサウルの姿で、御言葉が欠落していました。

「初めにことばがあった」本書の有名な冒頭に、キリストの先在性ならびに、創造と救いを発す神のことばの先在性が、創世記1章を模して強調されます。対するサタンは以上の妨害しか出来ず、神の許容範囲内で世を支配します。その縮図がヨブ記で、彼は家族&財産&健康を奪われる激しい試練の後に、信頼すべき三友人の心無いことばの数々で、主にある自分を揺さぶられつつ、三人に反論するだけでなく、自己防衛を志す内なることばにも翻弄されます。最善を尽し神に問いかけるも、孤独が彼を蝕み精神的に制御不能に陥ります。対する神からの第一声は叱責と共に、人間だけで開かれぬ道があることを、教えます(ヨブ 38:1)。同様にその信仰で「神の友」(ヤコ 2:23)と呼ばれた人物が、アブラハムですが(ハブ 11:8-19)、彼の悩みや失敗まで創世記は具に記します。両者とも祝福の基となるも、見えない神のことばを信じる訓練を受けました。皆さんは誰を友としていますか。不動の信仰者は皆無と聖書は語っています。誰もが人のことばに影響されます。ヤコブは世の友は神の敵と断罪(ヤコ 4:4)。主イエスは信者を友とし(15:13)内住の聖霊は御言葉を深めてくださいます。

11月27日

「慰めに満ちた神」

イザヤ 40:1-5

武安 宏樹 牧師

批評的な学者は本章以降「第二イザヤ」としますが、本書の包括性に鑑みて、全体を統一的に味わないと、「慰め」の豊かな意味も見落としてしまいます。前8世紀の南王国はウジヤ治世下で絶頂期にありましたが、やがて北王国を滅ぼすアッシリヤとの関係を巡って、神に従うか人間の方策に依り頼むかで、難しい舵取りを迫られていました。結果的に200年を経て捕囚となりますが、南王国へのさばき&回復について、遠望するようにイザヤは預言をしました。だから捕囚の憂き目に遭うとも、神に見棄てられたと自暴自棄にならないで、時至って祖国に帰る時に再建のため神を待ち望みなさい。以上メッセージが、込められています。原語「慰め」には「悲しむ」「悔いる」「思い直す」意が含まれ、単に傷ついた心の気休めではなく、まずは自分の置かれた悲惨さを悲しんで、次に犯した罪を悔いて愚かさに気づき、されど罪深さに立ち止まるのではなく、こんな罪人を赦したまえとひざまづく時に、神が与えられるのが「慰め」です。イザヤは捕囚民だけでなく、750年後ヨハネの声となって激しい悔い改めのメッセージと共に主イエスの訪れが慰めであると荒野で語ります(マ3:1-2)。

以上の多義的な意味を捉えながら、悲しみ悔いることが慰めにつながると、そうでなく罪を犯したから聞き従わなかったから、こんな酷い目に遭ったと、ヨブの三友人の如く因果応報的な神理解から、私たちは別個に考えがちです。けれども神の愛は最初の人を罪を犯して隠蔽して、言い訳したからといって、見棄てて別のスーパー人間を造り直したりしません。契約の神だからです。信者となったから罪を犯して無傷で済む訳でなく、応報的側面もありますが、それ以上に自制心も努力も通用しない、どうしようもない自分に気付かされ、それでも見棄てない神の愛の大きさを痛感することが、慰めへと至るのです。パリサイ人と取税人の祈りで、「神よ、罪人なる我を憐れみたまえ」(ルカ 18:13)と、下を向く取税人の心には、神が顧みられる一筋の希望がありました(マ5:4)。南王国に戻して、神は外交や偽りの神々でなく御自分と向き合うことを望み、捕囚に陥らせました。悲しく悔いるだけでなく、解放されて救われることが、どれほど慰めとなるかを教えられたのです。悲しむ者に介入するのが聖霊で、私たちはどのように主の道を直ぐにし、栄光の顕現を待望できるでしょうか。

12月4日

「その御腕で」

イザヤ 40:6-11

武安 宏樹 牧師

一つ目に「主の息吹がその上に吹くと、草はしおれ、花は散る」(7節)から、復興支援ソングの如く「花は咲く」歌は多いですが、「散る」は桜など多くとも、「枯れる」は滅多にありませんから、散れど何時か咲く転生的希望が日本人にあるのでしょうか。聖書でも「巡り巡って…その巡る道に風は帰る」(伝 1:6)とありますが「風の道がどのようなものか」(伝 11:5)は神の業との有神論です。原語「息吹」は「風」「霊」とも訳され、創造主が人を息吹で生かし、敵を暴風で散らし、新しい霊で救い生きる目的を導く、スピリチュアルな意があります。キリスト者は御言葉の風と聖霊の息吹から、風の主なる神が分かりますし、湿った心が爽やかにされ、主の御心の風向きを判定し、悪魔を追い払います。

二つ目に「良い知らせを伝える者よ、高い山に登れ」(9節)ホレブ山上にて、霊的戦いに勝利するも消耗したエリヤは、大風が山々を裂き、地震が起こり、火が燃える恐るべき臨在を通して、敵の恐怖や奉仕の無意味を思う不信仰を砕かれて、告げられた使命に心を新たにします。山上にて練り清められて後、町々に下りて「良い知らせ」を叫ぶことは、主イエスの宣教と同じです(マ 4:)。私たちも山上で備えられないと、「良い知らせ」を叫ぼうにも止められます。善を行おうとするのに何故と思いますが、世の流れは御言葉と逆行します。「面倒臭い」「何になるのか」「変に思われぬか」加えて神殿再建時のような、妨害も来ます。それ以上に厄介なのはプライドと疲れから来る自己憐憫です。

三つ目に「見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める」ですから私たちの為すべきはヨハネの如く、「主の道を用意」することです。必ずこの世の不条理に主が鉄槌を下し、目の見えない人が開眼する日が来て、世&罪&悪霊による惑わしから解放され、主が雲に乗り再臨する日が来ます。そのような至福の瞬間を待ち望みつつ、主の「御腕」とはどのような腕なのか。それが単に剛腕だけでないことが、11節の優しい牧者の記述から明らかです。主は勝利者に留まらず、罪を犯したり意固地になる目の開かれていない羊を、養いながら抱き寄せて愛を示される方です。「全能者・大能者は有難いですがそれだけでなく牧者なる方が私たちを慰めてくださるのです」(小林和夫師)

12月11日

「系図の不思議」

マタイ 1:1-17

武安 宏樹 牧師

本書冒頭の系図は聖書を読み始めた人に退屈ですが、ユダヤ人には重要で、旧約&新約の橋渡しともなり、名前を列挙して旧約聖書を要約してもいます。同じ系図でもルカ3章は肉親をアダムまで遡り、本書はアブラハムから発し、ダビデと捕囚を経てキリストに通ずる、族長&王位&放浪の14代ずつ三期で、聖書の根拠と歴史の流れから、イエスが「由緒正しき」救い主と証明しますが、問題は「～によって」(3,5,6節)と補足される、「曰く付き」の四女性の存在で、ラハブはカナン人であり遊女、ルツは敬虔ですがモアブ人、さらにタマル&バテシエバは姦淫の女でした。系図的には男子の名を記せば目的を達するも、著者マタイは歴史的失態を晒すことで、表面的きよさを誇るユダヤ人を砕き、反対に罪があれど外人が居ても、キリストの恵みが勝利することを示します。王期の系図の妙ですが、父が善くても子が悪かったりその逆の場合もあって、ソロモン(善)⇒レハブアム(悪)⇒アビヤ(悪)⇒アサ(善)⇒ヨシャパテ(善)⇒ヨラム(悪)⇒ウジヤ(善)⇒ヨタム(善)⇒アハズ(悪)⇒ヒゼキヤ(善)⇒マナセ(悪)⇒アモン(悪)⇒ヨシヤ(善)⇒エコニヤ(悪)。概ね交互に入れ替わります。

よって「しみも咎も無い」なんてとんでもない。この系図を見てユダヤ人が誇れるものは無く、ただ神が墮落以降の救済計画において選ばれただけです。真実な神はアブラハムとダビデ兩人への約束を履行され(創 12:3/Ⅱサ 7:12)、人の不義と神の恵みの延長線上に、キリストの誕生があると暗に示しますが、イエスの血筋に関してはそうですが、「ヤコブがマリヤの夫ヨセフを生んだ」ヨセフが系図に無関係であることも示します(「お生まれになった」受動態)。「しみも咎も有る」由緒正しき家系から、庶民的な大工の子が神の奇蹟で誕生。この福音こそが罪人も異邦人も社会の最下層にも、有効だと証ししています。「私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」(Ⅱマ 1:16)とパウロは語ります。また本書が系図で始まり、「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」(28:19)で終わるのも象徴的です。私たちの交わりは、近く同じ枠にある人々で終始し、その外の人々を遠ざけていないでしょうか。キリスト者(油注がれた者)は血筋でなく、開かれたキリストの血に生きます。

12月18日

「聖霊によって」

マタイ 1:18-25

武安 宏樹 牧師

① 聖霊による導火線（ルカ 1章）

祭司ザカリヤは御使いによる託宣を、その場で受け入れることができずに、ヨハネ産後まで啞者となりますが、妻エリサベツは恵みとして感謝しました。次いで御使いはマリアに処女懐胎を伝えますが、先の老女妊娠を聞いており、「どうぞ、あなたのおことばどおり…」受け入れます。二女性の純粋な信仰と、ザカリヤの不信仰が対比されますが、後にヨハネ命名における夫婦の一致へ。ここに聖霊がマリア&エリサベツ、エリサベツ&ゼカリヤ、ヨハネ&イエスを麗しく結び合わせることで、ヨセフ&マリア「夫妻」の信仰の範となるのです。信仰は神との個人的関係に始まり、人と人が互いに聖霊を介して成長します。

② ヨセフの熟慮（18～19節）

ヨセフの心境は分かりませんが、悪い予感も頭をよぎったかも知れません。とはいえ善後策を練りながらも、律法の光の中を歩んできた二人には信頼が、あったはず。彼は「正しさ」を貫こうとする彼方に「あわれみ」も見ながら、彼女を守るために自由な状況を前向きに選び、その熟慮は律法理解と洞察に根差しました。喜怒哀楽や不信に流されずしっかり御言葉を思い巡らす力が、私たちにも求められています。「聖霊によって」記述はなくとも彼の判断こそ、聖霊の実です（ガラ 5:22-23）。男性は熟慮と決断力のリーダーシップによって、信仰の扉を開きます。神に選ばれて正義と愛を追求する真実な聖徒の姿です。

④ ヨセフの従順（20～25節）

彼も御使いを通して語られ、これまでの熟慮が聖書のインマヌエル預言と、つながって奇蹟を受け入れる下地となって、即座に離縁への迷いも断ち切り、マリア同様に結婚準備へ確信をもって踏み出します。以上が聖霊の働きです。それは単に信仰者に正しい道を示し、決断と行動を促すだけではありません。「神がわたしたちとともにおられる」臨在が彼を内側から熱く動機づけます。祈って示されたら即行動も悪くありませんが、臨在から常に聖霊と会話して進むことです。そうして彼は子を宿す妻の肉体を汚す誘惑から自制しました。歴史が動く時に信仰の質が問われます。彼の成熟した信仰から学びましょう。

12月25日

「神様のプレゼント」

ヨハネ 1:1-5, 9-14

武安 宏樹 牧師

① 神の子どもとなる「特権」

他の箇所「権威」「権利」「力」「支配」などと訳されて 80 箇所以上登場する、「特権」とは何かを出来る力を持っており、周囲の反対に対向しうるものです。「特権階級」といえば近代はブルジョア、現代ではセレブなどと言われますが、何億も資産を有する方も一握り存在する一方、貧困に喘ぐ層も増えています。世の富が社会全体に回らぬ現状に歯痒さを覚えています。神の子となる特権とは、人を動かす億単位でも世界を動かす兆単位でも買えない、有り難いものです。この特権は対価でなく単に信じるだけで得られる、一見して虫の良い話です。でも人が親から受ける如く、創造主は神のDNAを人に用意しているのです。

② 罪の赦し

聖書は人は生まれながらに罪を負っていると教えますが、日本人の多くは違和感を抱きません。罪とは何か「やらかした」から負うものと考えからず。仏教的には業&因果の図式ですが、聖書も神の法に反すれば罪という図式は、そう変わりませんが、逆に言えば神の前では一つでも罪だから全員が罪人で、満足できる者は皆無との教えは、よく考えてみれば公平で理に適っています。罪を犯したい人は誰もいませんが、知らず知らずのうちに犯すのが罪です。創造主の望むところを果せないストレスが生じる。罪は業でなく性質です。そこで罪ある人間と聖なる神を、キリストが死罪で償って橋を架けたのです。

③ 永遠のいのち

罪の赦しの祝福は私たちにこの世で生きる希望を与えますが、あの世でも生きる祝福を聖書は約束しています。死後は極楽浄土か地獄か地を漂う霊か、他宗教では明言していませんが、キリストは神のもとから世に来られたので、天の御国はどのようなところか証し、光の子として世の闇を照らしています。戦争や震災や経済格差や政治不信の中で、何が楽しくて生きるのでしょうか。されど「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」(5節)と、朽ちず消されない福音が、それも時間も空間も霊界も越えて輝いています。一度しかない人生です。死後の行先を見据えて目的ある人生を送りましょう。